2006（平成18）年度
教育学研究科　修士論文

子どもの造形表現にみる住空間の変容と家族像

京都教育大学教育学研究科
教科教育専攻　美術教育専修
指導教員　石川誠
指導教員　安江勉
055072
山川真樹

梗概

本論文では，「家族」という一つの集団と，その「家族」が生活をする場である「住空間」との具体的な関わり合いを通して表れてくる「家族像」と，子どもの造形表現の中に表れてくる「家族像」とを関連させて論じていく。

本論文の構成としては，まず序論で，問題の所在と本研究の目的を述べる。

第Ⅱ章では，「家族像」と「住空間」について予備的に考察を行う。そして，「家族」や「住空間」「造形表現」のありように影響を及ぼすと考えられる家族・住空間の基盤となる生活と，そこから表れる子どもの造形表現に影響を与える，社会の経済状況と生活様式の視点から，二つの時期に分ける。その大きな転換期として，戦後の日本の急成長に歯止めをかけることとなった原油の供給逼迫および価格高騰と、それに伴う経済混乱の時期を時代の分かれ目とする。また，その時代の教育政策に規定されている図画工作教科書についても，学習指導要領の変遷を追っていくことで，時代が教育に何を求めていたのかについても明らかにしたい。また，教科書の作品だけでは不十分であるので，合わせて雑誌『教育美術』（教育美術振興会）に掲載されたコンクールの作品についても考察する。ただし，媒体の特性の違いがあるので二つを同じように扱うことはできないが，全体としての傾向を見出していきたいと考えている。

第Ⅲ章では，『図画工作教科書』や雑誌『教育美術』から子どもの造形表現にみられる「家族」や「住空間」に関する作品を抽出し，変化を分析する。また，具体的にその時代に建てられた集合住宅や住宅の事例を示し，子どもの造形表現との関連について考察する。その際に，第Ⅱ章で論じたオイルショック以前，以後を「高度経済・大量消費時代」「低迷期・個別化時代」とし，二つの時代区分に分けてそれぞれ分析を行う。

第Ⅳ章では，戦後から現代にかけての図画工作教科書や雑誌，住空間にみられる家族像について三つの視点から全体的な考察を行う。一つ目として，教科書・美術教育雑誌にみられる家族像について。二つ目として，住空間の変容にみられる家族像について。三つ目として，子どもの造形表現と住空間の関わりについて述べる。

第Ⅴ章では，最終的な結論を述べる。本研究を通して，社会の状況の変化が子どもの造形表現にそれなりの力学が働いて反映していることを見出すことができた。それぞれの時代ごとの家族の生活スタイルの変化が，子どもの造形表現や住空間にも表れていた。子どもの造形表現に，家族内での役割の変化や人間関係の変化が表出しているということは，子どもの造形表現における発想の源が，家庭生活からの影響を受けているといえる。

目次

Ⅰ序論 1～6
1．問題の所在 1
2．本研究の目的 1
3．研究の構想と方法 2
（1）本研究の全体構想 2
（2）子どもの造形表現に関する研究手続きと分析の基準 3
（3）住空間に関する研究の手続き 5
（4）本論文の構成 6

Ⅱ子どもの造形表現に表れた家族をめぐる概念 7～12
1．家族像と住空間について 7
2．生活の表れとしての造形表現 8
3．家族・住空間・造形表現の変容の背景 9
（1）オイルショック以前 9
（2）オイルショック以後 10
4．学習指導要領の変遷と図画工作科 11

Ⅲ子どもの造形表現と住空間の分析 13～46
1．分析方法 13
2．結果と分析 13
（1）高度経済成長・住宅の大量供給時代 13
1）家族の出現数の変化 13
2）公共空間の出現率の変化 15
3）祖父母の出現率にみる家族構成の変化 19
4）家事労働の出現率の変化 21
5）住空間の変容にみられる家族像 24
6）考察 28
（2）経済の低迷期・需要の個別化時代 29
1）家族の出現数の変化 29
2）公共空間の出現率の変化 30
3）祖父母の出現率にみる家族構成の変化 32
4）家事労働の出現率の変化 34
5）住空間の変容にみられる家族像 38

6）考察 45

Ⅳ全体的考察 47～50
1．教科書・美術教育雑誌にみられる家族像 47
2．住空間の変容にみられる家族像 48
3．子どもの造形表現と住空間の関わり 49

Ⅴ結論 51～53

■付記 54
■註および引用文献 55
■図版出典 56

Ⅰ.序章

1. 問題の所在

子どもの表現に影響を与える要素には，メディアを始めとした様々な要因があると考えられる。

近年，高度に資本主義が発展する中で，離婚率の上昇，家庭内暴力，子どもの非行，非婚化・晩婚化・少子化といった社会の変化が起こっている。家族のあり方も多様化してきており，戦後から現代にかけて家族機能が縮小・解除されてくると同時に家族の中で個々が自由度を高めている。結果「父と母」「夫と妻」という役割構造も変わってきたと考えられる。このような社会背景の変化，そしてそれに伴う家族の変化もまた，子どもの造形表現のありように影響を与える一つの要因ではないだろうか。人にとって家族とは人格形成の基礎となるものである。

家族と教育の関わりについて教育学者の藤田英典（1988）は次のように指摘している。

「戦後日本の家族は，子どもを共同体的な地域社会から引き離し，プライベートな家庭の中の中心的な存在にしてきた。近代の家族と学校は，伝統的な共同体から子どもを隔離し，囲い込んできた。部分的に外部化された子どもの教育をめぐって，さまざまの矛盾と葛藤が顕在化し始めており，その調整を強いられている」[1]

かつての伝統的な共同体的は，本来，子どもに対する教育力をもっていたと考えられる。子どもは，村や町など，地域での共同生活を営むことにより，直接的に祭礼などに参加することや，間接的に大人の姿をみることを通して，一定の価値や規範を学ぶことができたといえる。しかし，戦後の経済的発展の中で，子どもは私的な「核家族」の中に囲い込まれ，地域社会との連帯を薄めていくこととなった。これらのことは，子どもの造形表現にも何らかの影響を与えたと推察される。

2. 本研究の目的

本研究の目的は以下のように設定した。

① 家族や生活空間の変容が，子どもの造形表現にどのように表れるかを明ら

かにすること

② 住空間にみられる家族像の変容を把握すること

③ 上記①②から両者の家族像がどのように重なり合って表れるか，相互の関係を明らかにすること

子どもの表現には，風景を表したものや夢・願望・ファンタジーなどの物語を表したもの，生活を表したもの，等に分けることができる。本研究では，子どもの表現の中でも「生活画」に注目する。生活を表した子どもの表現には，家族が現れることがあり，その時代の家族像が反映されるといえる。宮武辰夫は，著書『幼児の絵は生活している』の中で，「幼児の絵こそは，彼らの生活の記録であり，心意の表現なのである。」[2]と述べている。つまり，子どもの自発的表現は，その子どもの生活の中から生まれてくるのだということである。

「住空間」もまた，その時代の家族観を表す。子どもの造形表現と家族の変容の関わり合いを調べていく際には，住空間を考察することが必要であると考えており，住空間の変化と子どもの造形表現の変容とを照合させることから，子どもの造形表現の中に住空間の関わりを読み取っていきたい。家族を客観的にみる指標となるもので，住空間はほとんど唯一の具体的な空間であると考えている。

3．研究の構想と方法

（1）本研究の全体構想

社会の変化から生まれる家族像の変容が，子どもの造形表現にどのように影響を与えるのか，また，家族の多様化に伴い住空間がどのように変容してきたか，これらの相関関係をみることから両者の関係をとらえたい。

本研究の全体構想としては，経済や社会構造の大きな変動が起こった時期を境にし，それら社会状況の変容と家族のありように着目し，以下に示す①－③の手順で考察していく。

① 「高度経済成長・住宅の大量供給時代」の教科書及び雑誌に掲載された造形表現にみられる家族像についての考察をする。「高度経済成長・住宅の大量供給時代」とは，昭和 35（1960）年から昭和 48（1973）年までの期間とする。

② 「経済の低迷期・需要の個別化時代」の教科書及び雑誌に掲載された造形表現にみられる子どもの造形表現と家族像についての考察をする。「経済の

低迷期・需要の個別化時代」とは，昭和 48（1973）年以降から現代までの期間とする。

③　住空間の変容と子どもの造形表現にみられる家族像についての考察

また，考察の対象とした時期を昭和 35（1960）年からとした理由は，戦後日本が高度成長の時期を迎えたと言われているのが 1960 年代からであること，学習指導要領が昭和 33（1958）年版から「告示」となり，法的な拘束力を持つようになったことからである。

そして，昭和 35（1960）年から現代までの大きな時代の節目を昭和 48（1973）年としたことについては，昭和 48（1973）年に起こったオイルショックが，昭和 35（1960）年から続いた高度経済成長に終わりをつげた大きな時代の出来事であったからである。この出来事により，社会構造が大きく変動したと考えられるためである。

（2）子どもの造形表現に関する研究の手続きと分析の基準

①　子どもの作品を収集

収集する対象として，美術教育雑誌やコンクールの作品，教科書といったものが考えられるが，本稿では，教科書を中心に，美術教育雑誌『教育美術』（教育美術振興会）に掲載された作品も合わせて，子どもの作品を収集することにした。対象とする図画工作科教科書は全国で高い占有率を有する日本文教出版の教科書とした。美術教育雑誌『教育美術』においては，「全国教育美術展」での入選作品を対象に考察した。

まず，教科書と美術教育雑誌との違いについて最初に述べておく。教科書は，学習指導要領にのっとった全国一律の基準をもとにつくられている。ある意味で，その時代の理想や願望が反映されており，「生活画」も題材として取り上げて行こうという意志が含まれている。美術教育雑誌については，一律の基準がない分，教科書よりもより実態に近いものだと捉えることができる。

教科書だけでは標本数が少ないので，さらにより一般性をはかるため美術教育雑誌の作品も取り上げた。このことにより，より偏りがないデーターが得られると考えている。

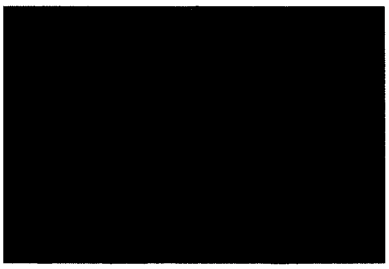
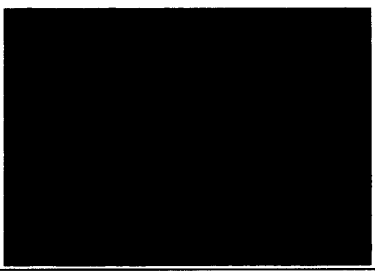
具体的には，小学校１年生から小学校６年生までの各学年の，教科書・『教育美術』に掲載された子どもの造形表現の中で家族関係が描かれているものを抽出した。なお，家族関係が描かれている作品を抽出する基準は次の２点である。

・「生活画」の中で，家庭生活に関わりがあると思われる人物が登場している作品。

・ 題材名や作品のキャプション等で家族が描かれていると判断できる作品。

例えば，室内の様子が描かれている二つの作品を例に挙げると（**表 1**），左図ではキャプションに「うれしいな。ばんごはんはてまきずし」とあったことから，食卓で家族が食事をしている様子が描かれていると判断した。「場所」については，可能性として住居内やファミリーレストランなどが考えられるが，周りに店員や他の客らしき人が描かれていないので，住居の中での様子であるとした。ただし，この絵の場合家族の「誰」が描かれているのかについてはわからないものとした。次に，右図に関して，先ほどのものと同様に食卓の様子が描かれているが，キャプションに「赤いガラスの城」とあり，また描かれている建物の様子が一般的な住居でなく，お城であることからお話の絵であると判断した。

表 1「家族とみなす作品」と「家族とみなさない作品」との比較

「家族とみなす作品」	「家族とみなさない作品」
	
平成４年　『図画工作』１年生教科書	昭和 43 年　『図画工作』３年生教科書

② 時代の区分

学習指導要領の改訂が行われる度に教科書も改訂されるが，本研究では，戦後経済が劇的に変化し，日本が復興していった時期を一つの時代の指標として，昭和 35 年昭和 48 年までに出版された教科書を出版時期に対応して３期に分けて考察する。

次に，活発な投資・消費が行われる一方で，これまでの過密化の弊害が見られるようになってきた時期である昭和 52 年から平成 17 年までの教科書についても同様に，出版時期に対応して３期に分けて考察する。

なお，収集対象とした教科書の出版は，指導要領の改訂と部分改訂のいずれをも含んでいる。

③ 作品の分析

教科書・美術教育雑誌が出版された年度と，その時期周辺に起こった家族や

教育に影響を与えそうな事件や出来事との関係性について考察した。次に，子どもの造形表現の中でモチーフとして登場する人物が家族の中でも「誰」なのか，そして表れる「場所」がどこであるのか，描かれている人物が「何をしている」のかについて着目して分析した。これらの分析により子どもをとりまく環境が時代とともにどのように変化してきたのかが読み取ることができるのではないかと考えた。

（3）住空間に関する研究の手続き

① 戸建て住宅及び集合住宅作品を収集

戦後から現代にかけて，設計・施行された戸建て住宅及び集合住宅を，建築専門誌「新建築」「建築文化」「新住宅」などから抽出し，分析していく。

戦後の新たな住まい方として提案され，実現した，「５１Ｃ型住宅」を始めとし、新たな住生活のモデルとして計画された戸建て住宅及び集合住宅は，時代を引っ張ってきたといえる。建築雑誌に取り上げられる住宅は，その時代の中でも一つのモデルとして、注目されたものである。そこに掲載された住宅について時代を追って分析していくことで，時代ごとのモデルの移り変わりが見出せると考えている。その他のマンションや公団住宅，ハウスメーカーの作品も合わせて収集し，作品に偏りがでないようにする。

② 時代の区分

戦後から 1960 年代後半までと，1970 年代から現代までを，大きく二つの時代区分に分ける。

1951 年に公営住宅法が施行され，1955 年には日本住宅公団が設立される。高度経済成長と都市への人口集中に後押しされ，「住宅大量供給」時代となる。これを一つの時代区分とする。

1970 年代になると，住宅戸数の充足に伴い量よりも質が求められるようになる。社会の変化に対応する新しい，住居の展開がみられるようになる。つまり「住宅水準の向上」時代である。これをもうひとつの時代区分とする。

さらに，この二つの時代区分のそれぞれを，さらに３期に分ける。このとき分ける根拠は，子どもの造形表現に関する研究と同じである。

③ 作品の分析

共用スペースと個室との関係から，「食べる」「寝る」「憩う」という暮らし方のスタイルがどう変化して，空間に表れてくるのか、また外部空間との関わりについては，住居の中でどの居室を外部に開いているのか，隣近所との共用の領域はどこなのか，ということに着目し，それらの空間構成が，時代背景と

どのように関わっているのかについて分析していく。

（4）本論文の構成

本論文では，「家族」という一つの集団と，その「家族」が生活をする場である「住空間」との具体的な関わり合いを通して表れてくる「家族像」と，子どもの造形表現の中に表れてくる「家族像」とを関連させて論じていく。そこで，まず第Ⅱ章では，「家族像」と「住空間」について予備的に考察を行う。そして，「家族」や「住空間」「造形表現」のありように影響を及ぼすと考えられる家族・住空間の基盤となる生活と，そこから表れる子どもの造形表現に影響を与える，社会の経済状況と生活様式の視点から，二つの時期に分ける。その大きな転換期として，戦後の日本の急成長に歯止めをかけることとなった原油の供給逼迫および価格高騰と、それに伴う経済混乱の時期を時代の分かれ目とする。また，その時代の教育政策に規定されている図画工作教科書についても，学習指導要領の変遷を追っていくことで，時代が教育に何を求めていたのかについても明らかにしたい。また，教科書の作品だけでは不十分であるので，合わせて雑誌『教育美術』に掲載されたコンクールの作品についても考察する。ただし，媒体の特性の違いがあるので二つを同じように扱うことはできないが，全体としての傾向を見出していきたいと考えている。

第Ⅲ章では，『図画工作教科書』や雑誌『教育美術』から子どもの造形表現にみられる「家族」や「住空間」に関する作品を抽出し，変化を分析する。また，具体的にその時代に建てられた集合住宅や住宅の事例を示し，子どもの造形表現との関連について考察する。その際に，第Ⅱ章で論じたオイルショック以前，以後を「高度経済・大量消費時代」「低迷期・個別化時代」とし，二つの時代区分に分けてそれぞれ分析を行う。

第Ⅳ章では，戦後から現代にかけての図画工作教科書や雑誌，住空間にみられる家族像について全体的な考察を行う。

第Ⅴ章では，最終的な結論を述べる。

Ⅱ．子どもの造形表現に表れた家族をめぐる概念

1．家族像と住空間について

まず，本研究における「家族像」について検討し定義しておきたい。

森岡清美（1983）は，家族とは「夫婦・親子・きょうだいなど少数の近親者を主要な成員とし，成員相互の深い感情的かかわりで結ばれた，幸福（well-being）追究の集団である」[1]と述べている。

家族が幸福追求の集団であるとすれば，子どもの視点を通して表出した「家族像」（家族が描かれている作品）にも，その時代ごとの世相を反映した家族の理想型が現れると考えられる。

次に，本研究における「住空間」の定義付けを行っていく。建築家の香山壽夫は，「建築芸術は，現実の生活空間において，現実の生活空間として，成立する芸術です」[2]と述べている。とりわけ，住居は家族という人の営みが多分に関わってくるものである。本研究での住空間は，「家族の現実の生活に具体的に表れるもの」として定義する。そして，住空間からその背景にある生活様式の変化に伴う家族観の変化を，探っていきたいと考えている。考察対象の「住空間」としては，集合住宅，戸建て住宅ともにとりあげる。香山は「人は，全て，何らかのかたちで集まって住んでいる。そのことは，建築あるいは都市とは，人と人とのつながりあるいは関係をつくり出すものである，と先に述べたことにつながっている。従って，全く人里離れた場所に孤立した一軒家を別にすれば，全ての住居は何らかのかたちで他の住居と関係を持って建てられている。その意味で，全ての住宅は集合住宅であると考えて計画されデザインされねばならないと言える」[3]と述べている。住居は家族を構成する一つの要素であり，その住居と住居との関係を読み解くことで，人々の間に共有されている生活の形式の存在を確認し，そこから家族像の表出を見出して行きたい。

この様にみてくると，子どもの造形表現と住空間それぞれに「家族像」が表出する。「家族像」はその時代の社会のありようによって，家族に様々な影響を与え変化する。以上のことを踏まえて，子どもの造形表現をめぐる家族をめぐる概念をあらわしたものを以下に示す（**図 1**）。

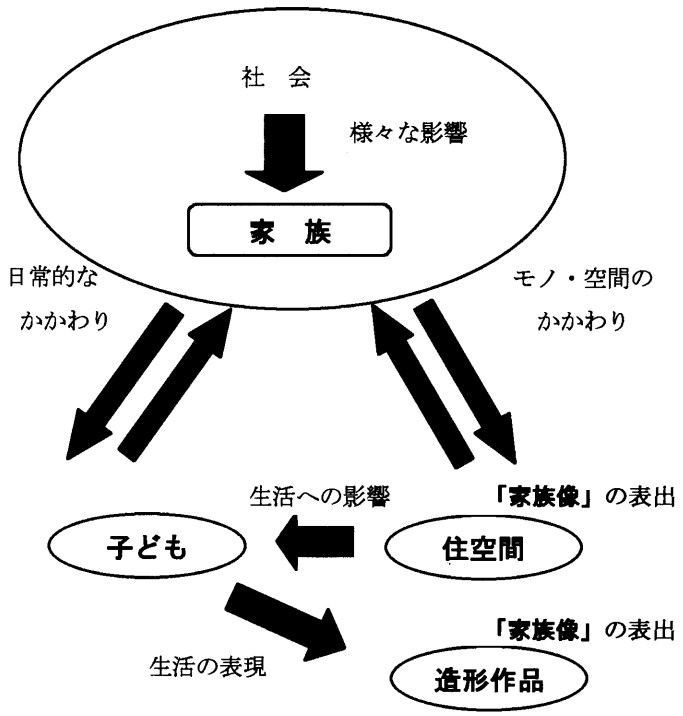


図１　筆者が考える「子どもの造形表現に表れた家族」をめぐる概念

２．生活の表れとしての造形表現

まず，最初に断っておくと子どもの造形表現は全て「生活画」ではない。子どもの興味は住空間からの影響だけではなく，アニメやテレビといったものからも多分に関わりがある。それらと比べ，家庭生活は内にこもった個別的なものであると捉えられがちであるが，教育学者の萩原元昭は「家庭環境は，子どもが生物的固体から社会的固体に形成されるきわめて重要な社会学的母体であり，その担い手である親の役割は，社会化される子どもにとってきわめて重要である。」[4] と述べている。

また，心理学者の河井隼雄は，家庭教育の一般的な課題について「家族の経済的な状態や住宅の事情，家庭内の信仰や文化的な行事の伝承，両親の道徳的美的な価値観や趣味の有無による家庭の雰囲気，「家風」が，いずれも家庭生活の連続性・信頼性にかかわる条件として子供の発達に重要な意味を持ってくるのである。」[5] と述べている。つまり子供達にとって，日常の家庭生活での体験が人間形成にとって極めて重要であるということである。もちろん，家庭生活の中に限らず，子どもが人間関係を体験する機会は学校や公園，地域の中

と多方面に広がる。しかし都市化が進むにつれて，子どもたちの体験の場が少なくなってきていることもまた事実である。そこで，本研究では，子どもにとっては一番はじめに出会う大人との関係の場，そして生活時間の大半を過ごす場である家庭生活を中心に，子どもをとりまく状況について，子どもの造形表現から考察していきたい。

3．家族・住空間・造形表現の変容の背景

家族・住空間・造形表現の変容は社会構造の変化と深い関わりがあると考えている。そこで，本節では教科書の発行年度とその社会的背景について論じる。当然ながら，教科書は指導案の改訂に伴ってなされる事は，周知の通りである。教科書の改訂時期とその時代の出来事を並列することで，その時代を外観していきたい。

また，社会構造の変化を考察する際に，時代の大きな節目として，昭和 48（1973）年に起こったオイルショックは見のがせない。よって，このオイルショック以前・以後に分けて論じていきたい。

（1） オイルショック以前

調査対象とした教科書の発行年度と社会的背景となるその年代の出来事を以下（**表 2**）に示す。なお表中の第〇期は，調査対象とした昭和 35 年から昭和 48 年までの高度経済成長期の，教科書出版について，その時代背景から，Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期に分けて概観しようとしたものである。

高度経済成長期とは，「1960 年代を中心にわが国で起きた急速な経済成長。世界に類を見ない速度で進み，短期間に日本を世界屈指の工業国に発展させた」[6] 時期を指す。本研究では，高度経済成長期を次の三つの時代区分に分類して，論を進めることとする。

まず，昭和 35（1960）年に出版された教科書を第Ⅰ期とする。時代的にみると，日米安全保証条約が調印され，安保反対闘争が激化した。この安保騒動は，高度経済成長期へ向かう重要な出来事といえるので，まずこれを第一の時代区分とする。

次に，昭和 40（1965）年と昭和 43（1968）年に出版された教科書を第Ⅱ期とする。この時代は，東京が全く新しい近代都市になり，日本が急速に成長していった。高度成長がピークに達するまでのこの時代を第二の時代区分とした。

最後に，昭和 45（1970）年と昭和 48（1973 年に出版された教科書を第Ⅲ期

とする。昭和 45（1970）年には，日本は経済大国になっていた反面，公害や環境汚染が進むなど負の側面もみられるようになった。そして昭和 48（1973）年から低成長時代に入っていく。この時代を第三の時代区分とした。

表２　高度経済成長期における教科書の改訂年と社会的背景（筆者調べ）

第Ⅰ期 （昭和 35 年版教科書）	**昭和 35（1960）年** 〔カラーテレビ発売・国民所得倍増計画発表〕
第Ⅱ期 （昭和 40 年版教科書）	**昭和 40（1965）年** 〔東京オリンピック開催（S39）・東海道幹線開通（S39）・カラーテレビ・クーラー・カーという 3 種の神器（S41）〕 **昭和 43（1968）年** 〔アポロ 11 号月面着陸成（1969）〕
第Ⅲ期 （昭和 45 年版教科書）	**昭和 45（1970）年** 〔日本万国博覧会開催〕 **昭和 48（1973）年** 〔オイルショック〕

※　教科書出版年（全面改訂と部分改訂を含む）と時代背景から３期に分けたもの

（２）オイルショック以後

調査対象とした教科書の年度と社会的背景となるその年代の出来事を以下（**表 3**）に示す。なお表中の第〇期は，調査対象とした昭和 52 年から平成 17 年までの，教科書出版について，その時代背景から，Ⅰ期・Ⅱ期・Ⅲ期に分けて概観しようとしたものである。

オイルショック以降から現代までを，次の三つの時代区分に分類して，論を進めることとする。

まず，昭和 52（1977）年と昭和 55（1980）年と昭和 58（1983）年に出版された教科書を第Ⅰ期とする。第Ⅰ期は，時代的にみるとオイルショック以降，不安定な時代から，景気が回復していくまでの時期である。この時期を第一の時代区分とした。

次に，昭和 61（1986）年と平成元年（1989）年に出版された教科書を第Ⅱ期とする。この時期は，昭和 61（1986）年から平成３（1991）年頃までつづいたバブル経済の時期である。バブル経済とは「投機によって生ずる，実態経済と

かけはなれた相場や景気。バブル現象。」[7] である。このバブル現象は株価高騰や地価高騰を引き起こした。そして，地価上昇は，都市近郊に適当な戸建住宅を取得する事を困難にした。この時代を第二の時代区分とした。

平成４（1992）年と平成 14（2002）年と平成 17（2005）年に出版された教科書を第Ⅲ期とする。この時期はバブル経済崩壊後から現在までの時期であり，経済が低迷する中，経済的要素に関する格差が広がった時代である。この時期を第三の時代区分とする。

表３　オイルショック以降，バブルを経て現代までにおける教科書の改訂年と社会的背景（筆者調べ）

第Ⅰ期 （昭和 52 年版教科書）	**昭和 52（1977）年** 〔ロッキード事件（S53)〕 **昭和 55（1980）年** 〔イランイラク戦争・金属バット両親殺人事件〕 **昭和 58（1983）年** 〔東京ディズニーランド開園・任天堂がファミリーコンピューターを発売〕
第Ⅱ期 （昭和 61 年版教科書）	**昭和 61（1986）年** 〔男女雇用機会均等法施行〕 **平成元年（1989）年** 〔日本平均株価が史上最高値を記録〕
第Ⅲ期 （平成４年版教科書）	**平成４年（1992 年）** 〔阪神淡路大震災（H7）・地下鉄サリン事件（H7)〕 **平成 14 年（2002 年）** 〔学習指導要領改定・完全週５日制などゆとり教育進む〕 **平成 17 年（2005 年）** 〔愛知万博開催〕

※　教科書出版年（全面改訂と部分改訂を含む）と時代背景から３期に分けたもの

４．学習指導要領の変遷と図画工作科

図画工作教科書から，子どもの造形表現を考察していく際に，教科書の成立は学習指導要領に規定されるとも言える。学習指導要領にはその時代の教育観が反映されている。学習指導要領の変遷を追っていくことで，時代が教育に何を求めていたのかについて考察していきたい。

本研究で対象としている時代に当たる，学習指導要領の改訂年は，昭和 33（1958）年，昭和 43（1963）年，昭和 52（1977）年，平成元年（1989）年，平成 10（1998）年であるが，それをより長期的な流れの中で位置づけて解釈できるよう，戦後間もない昭和 22（1947）年版の学習指導要領図画工作編（試案）から記述していきたい。昭和 22（1947）年版は「米国バージニア州のコース・オブ・スタディーをもとにしながら従来の図画と工作の考え等を取り入れて作られたため，プラグマティズムの影響が大きく見られる」[8]との解釈があるように経験主義の色合いが濃い内容であった。その後の昭和 26（1951）年版でも，「生活主義・実用主義が基調になっている」[9]ため，経験主義的な教科学習は指導性が低く，学習が深まらないなど，「はいまわる経験主義」として批判された。ソ連が人工衛星の打ち上げに成功したいわゆる「スプートニク・ショック（1957）」といった社会背景もあり，昭和 33（1958）年版は「教育課程審議会答申に基づき科学技術的内容」[10]となっている。図画工作科でも，「内容は絵・版画・粘土（彫塑），模型をつくる（デザインをする），いろいろなものをつくる，鑑賞の四系統」[11]に編成され，教科の専門性が明確なものになった。さらに昭和 43（1968）年版では，「全学年を通じて絵画・彫塑・デザイン・工作・鑑賞という五領域の，整然とした系統性重視の構成となった」[12]とされている。

高度経済成長期以降，昭和 52（1977）年版の教科書では，「表現と鑑賞の２領域に整理統合された」[13]内容となっている。また，「造形遊び」が誕生した。平成元年版は，「昭和 52（1977）年告示の前学習指導要領の特徴を，さらに押し進めた性格」[14]となった。内容は「表現と鑑賞の２領域で，表現は４学年まで“造形遊び” “絵や立体に表す”，高学年に“絵に表す” “立体に表す”，全学年に“つくりたいものをつくる”が配置された。」[15]となっている。そして，学年目標が２学年でまとめられ，選択枠が拡大した。平成 10（1998）年版は，経験主義が押し進められ，造形遊びが高学年まで延長された。

このように，学習指導要領の変遷から読み取ることができる戦後日本の教育観は，経験主義的な考え方から始まり，時代の変化とともに学力低下への批判が高まる中で，次第に科学的な系統性を強めた内容へと移り変わっていったが，また経験主義に戻った。図画工作科の内容も時代とともにこの影響を受けた変遷が見られ，当然、図画工作科教科書の教科書や子どもの造形表現にも何らかの関係性があることが予想されるのである。

Ⅲ. 子どもの造形表現と住空間の分析

1. 分析方法

この章では，小学校図画工作教科書（日本文教出版）・雑誌（教育美術）に掲載された子どもの造形作品について，四つの視点から分析していく。加えてその時代の家族像の構築に影響を与えたと考えられる，住空間についても論じ，家族像の造形作品への表出についての傾向を見出したいと考えている。

子どもの造形表現については，はじめに，教科書について１年生から６年生までの全学年の教科書に掲載されている全作品点数を調査する。昭和 35（1960）年版から平成 17（2005）年版の合計作品点数は 2095 点であった。

次に，美術教育雑誌『教育美術』（教育美術振興会）についても，１年生から６年生までの「全国教育美術展」で入選した全作品点数を調査する。昭和 38（1963）年，昭和 40（1960）年から平成 17（2005）年の合計作品点数は 1873 点であった[1)]。

それらの作品の中から家族関係が描かれているものを抽出する。抽出した作品をもとに，「家族の出現率」「公共空間の出現率」「祖父母の出現率」「家事労働の出現率」等について，時代背景と関連させながら分析していく。さらにそこで出た結果と，住空間の変容とを対比させ，それぞれにみられる家族像の表出に関連性があるのかについて，考察する。

以後，分析結果について「高度経済成長・住宅の大量供給時代」と「経済の低迷期・需要の個別化時代」のそれぞれについて述べたい。

2. 結果と分析

本節では序論と前節で述べた分析方法によって出てきた結果について，数値を処理する。そして子どもの造形作品の中に描かれているものから見出すことの出来る傾向と，住空間の変容から見出せる家族のあり方の変化について，社会的な背景を踏まえて分析を加える。

その際に，オイルショックを大きな時代の分かれ目として，「高度経済成長・住宅の大量供給時代」と「経済の低迷期・需要の個別化時代」という二つの時代別に検討する。

（1）高度経済成長・住宅の大量供給時代

1）家族の出現数の変化

１年生から６年生までの全学年の教科書に掲載されている全作品点数のうち，

家族が出現する作品の数とそれ以外の家族が直接描かれていない作品の数の内訳を以下のグラフに示す。

第Ⅰ期・第Ⅱ期・第Ⅲ期の教科書における家族の出現率について調査すると，第Ⅰ期・第Ⅱ期と比較すると，第Ⅲ期では家族の出現数が減少していることがわかる（**図 2**）。第Ⅱ期までは二桁だったものが，第Ⅲ期以降一桁になっている。

また，この時期の『教育美術』については，第Ⅰ期の発行刊の入手が難しく，欠号が多かった為，正確な数値は第Ⅱ期以降からとする。第Ⅰ期のものに関しては，昭和 38（1963）年のものしか入手出来なかった。昭和 38（1963）年の「全国教育美術展」の入選作品のうち小学生の全作品数は 52 点であり，その中に家族を描いている場面はみられなかった。第Ⅱ期・第Ⅲ期については全て入手出来たので，教科書の場合と同様に図に示す（**図 3**）。第Ⅱ期，第Ⅲ期と大きな変化はみられなかった。

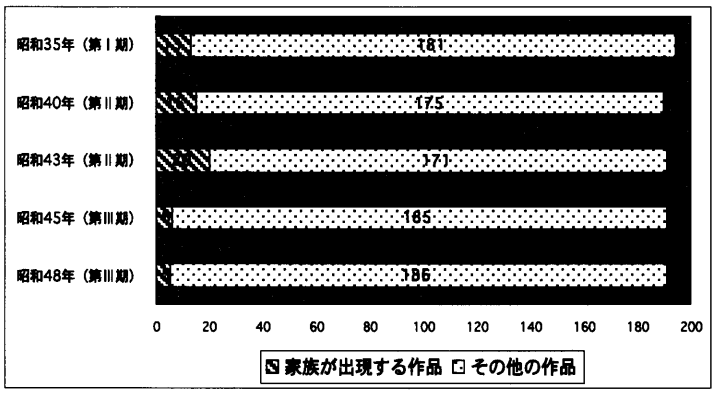


図 2　教科書作品における家族の出現数

※小学校の各改訂年でみた作品点数とその内訳

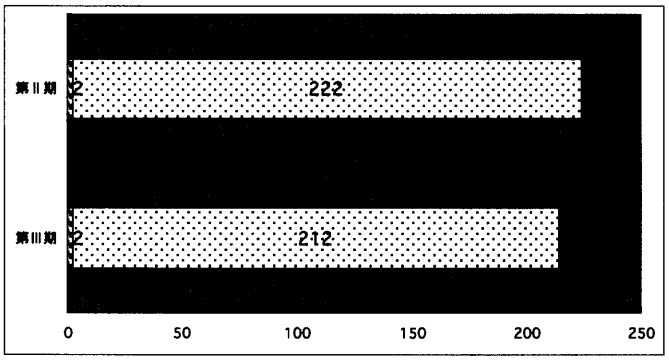


図 3　雑誌『教育美術』における家族の出現数

※小学校の全学年にわたる作品点数とその内訳

戦後日本は，第Ⅰ期の国民所得倍増計画，第Ⅱ期の東京オリンピックを経て，第Ⅲ期にあたる昭和 45（1970）年，46（1971）年では，経済発展がピークを迎えた。各家庭の生活のレベルも上がり，そのため家庭での教育費やマイホーム購入によるローンの支払いなどの出費も増えていったと考えられる。そのため，母親もパートなどで，働きに外へ出るという家庭が増え，結果家庭内には子どもだけが残るという状況もあったと推測される。すると，家族全員で食事をす

ることや，家族での団らんという機会も減り，家族自体を描くということが少なくなったのではないだろうか。加えて，子どもの興味自体も多方面に広がって行ったことも原因の一つと考えられる。

2）公共空間の出現率の変化

第Ⅰ期・第Ⅱ期・第Ⅲ期の教科書等における生活空間を，住居・仕事場とそれ以外の公共空間の出現する割合をみていく。ここで言う「公共空間（Public Space)」とは，公の施設のことであるが，役場や駅だけでなく遊戯場や飲食店，その他店舗など，住居以外の大勢の人が集まる場所として捉えている。

第Ⅰ期に比較して，第Ⅱ期・第Ⅲ期では，家族の生活空間（住居・仕事場）以外の公共空間での出現が増加していることがわかる。(**図 4**)。第Ⅰ期では，約 30%程度の出現率であった，公共空間の割合が，第Ⅱ期では 57%，第Ⅲ期では 50%と，第Ⅱ期・第Ⅲ期ともに 50%以上の割合になっている。

雑誌『教育美術』においては第Ⅱ期では，家族が描かれている作品２点中，住居・仕事場が描かれている作品は２点であった。第Ⅲ期については，２点中１点が，住居・仕事場が描かれている作品であった（**表 4**)。

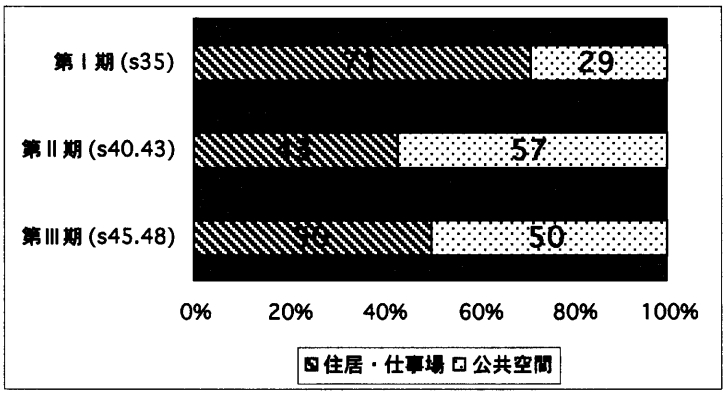


図 4　教科書作品における住居・仕事場と公共空間の出現する割合

表 4　美術教育雑誌ににおける住居・仕事場の出現する割合

	教育美術
第Ⅱ期　(S40, S43) (1965～1969)	2/2
第Ⅲ期　(S45, S48) (1970～1976)	1/2

児童の作品において，具体的に公共空間が，どのような場所を選んで描かれているのかについて分析すると，第Ⅰ期では街（**図 5**）や電車（**図 6**)，そして祭礼の様子（**図 7**）が描かれている程度であった。

第Ⅱ期になると，作品にも少しずつ変化が見られる。第Ⅰ期が街の様子や祭礼等の地域的行事だけだったのに対し，第Ⅱ期からはレジャー施設が登場し始

める。例えば，サーカス（図 8）や遊園地（図 9）などの家庭外の場所に家族が描かれるようになる。また第Ⅱ期・第Ⅲ期ともに海や川で釣りをしている様子（図 10）や花火に出かける様子（図 11），公園で自転車に乗る様子（図 12）が描かれている。このように第Ⅱ期以降には，レジャーや余暇施設と共に家族が描かれるようになる。



図 5　昭和 35 年『図画工作』1 年生教科書
作者と父親と友人で，街のカーニバルを観に出かけている場面



図 6　昭和 35 年『図画工作』1 年生教科書
作者と祖母が電車で，叔母の家に行く場面

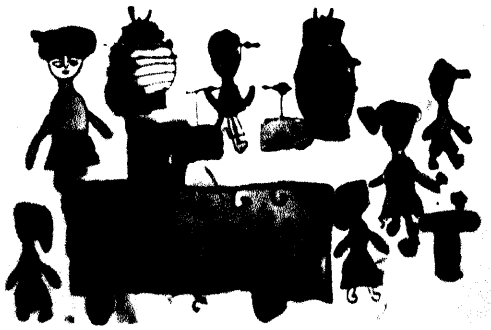


図 7　昭和 35 年『図画工作』1 年生教科書
作者と母親で街のお祭りを訪れた場面。

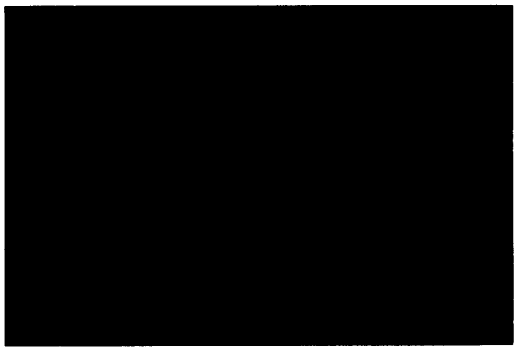


図 8　昭和 40 年『図画工作』3 年生教科書
作者がサーカスの公演を観ている場面。

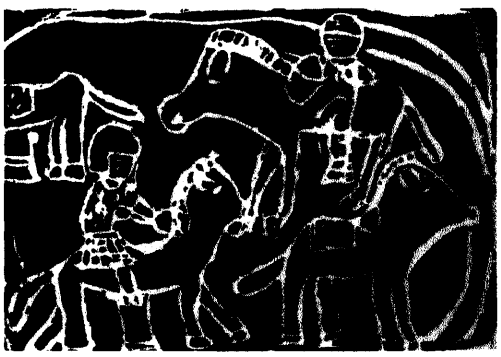


図 9　昭和 40 年『図画工作』2 年生教科書
作者と弟が，遊園地で木馬に乗っている場面。

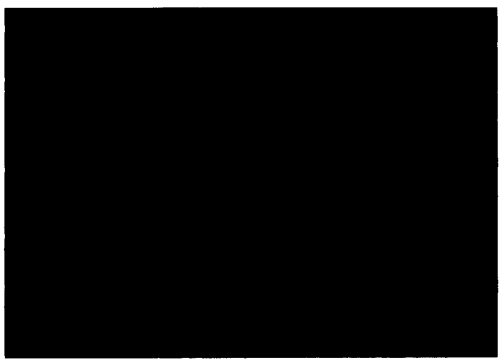


図 10　昭和 48 年『図画工作』4 年生教科書
作者が休みの日に釣りをして遊んでいる場面。

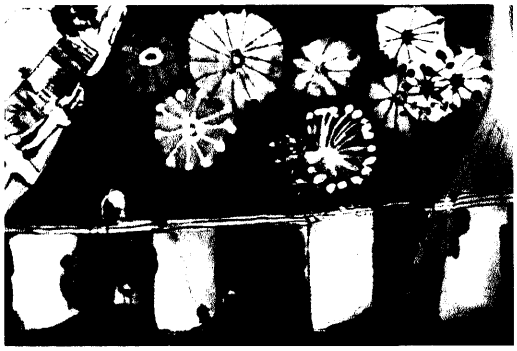


図 11　昭和 43 年『図画工作』4 年生教科書
作者が花火を観ている場面。



図 12　昭和 43 年『図画工作』3 年生教科書
休日に作者が，自転車の練習をしている場面。

また，『教育美術』において直接家族は描かれていないが，公共空間を描いたものとして，駐車場や夜の万博があった（**図 13，14**）。これらの絵はこの当時の社会状況を反映している。



図 13　昭和 43 年　『教育美術』
3 年生の作品
駐車場の風景。

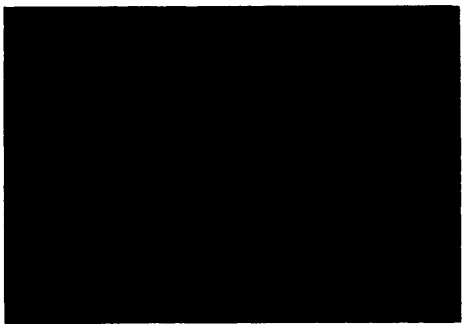


図 14　昭和 46 年　『教育美術』
5 年生の作品
夜の万博の風景。

第Ⅱ期以降，公共空間が描かれる割合が増えた理由について，考察していきたい。

要因として，以下にあげたことが考えられる。

- 第Ⅱ期以降の近代化
- 移動手段の増加
- 人々の生活スタイルの変化
- 車による移動やテレビを通してのメディアからの情報の増加

社会背景との関わりについて具体的に述べると，昭和 39（1964）年に東京

オリンピックが開催されるのに合わせ，東京，大阪間に東海道新幹線が完成し，高速道路や幹線道路が新たに建設され，モノレールや地下鉄といった交通網が整備されていった。昭和 43（1968）年に，日本初の超高層ビルが完成したことからも，都市部での都市化が進んでいったことがわかる。この第Ⅱ期以降の近代化によって，移動手段が増え，人々の集まる場所は家庭やその周辺以外の公共空間へと広がったと考えられる。また昭和 41（1965）年頃に，カー・カラーテレビ・クーラーが三種の神器と呼ばれるようになったことからも，人々の生活スタイルが変わり，車による移動やテレビを通してのメディアからの情報によって，住居・仕事場以外へと関心が向かっていったのだと思われる。

自動車の生産台数とそのうちの乗用車台数についての資料（**図 15**）によると[2]，昭和 35（1960）年の自動車の生産台数は 48 万台であった。それが昭和 44（1969）年には 467 万台と大幅に増加している。またそのうち，乗用車は昭和 35（1960）年の 16 万台から昭和 44（1969）年には 261 万台と自動車生産の半分以上の割合になっている。このことは，乗用車を保有する世帯が急激に増加したことを示している。そして，多くの世帯で乗用車を持つということは，人々の生活スタイルを大きく変えることへと繋がり，家族の自由な移動を可能にした。

一方，カラーテレビの本放送は，昭和 35（1960）年に東京と大阪で始まった。番組のカラー化は，昭和 39（1964）年の東京オリンピックを契機に急激に進み，放送時間も増加していく。昭和 37（1962）年にはテレビ受信契約数が 1000 万件を突破し，テレビの普及率は，48.5%となった。また，アメリカのテレビ映画もこの時代に次々と放送されるようになり，家庭内においても，外国文化が浸透してきたと考えられる。情報の供給量とその内容[3]について（**図 16**）は，昭和 35（1960）年と比較して昭和 43（1968）年には，テレビからの情報が 66%と大幅に増加している。

昭和 45 年版国民生活白書によると[4]，「昭和 38 年の年平均の教養・レジャー費は約 6 万 5 千円であったが，43 年には 1.73 倍の約 11 万 3 千円へと増加した。そして消費支出に占める割合も 13.6%から 14.8%へと急速に比重を高めている。中でも書籍費や旅行費の伸びは著しい」とある。この旅行費の伸びは，第Ⅱ期以降の，子どもの作品にレジャー施設や余暇施設が登場していることと，**関係性があると言える。先述のように，交通機関の整備や乗用車の普及との関**連も検討すべきだと考えられる。

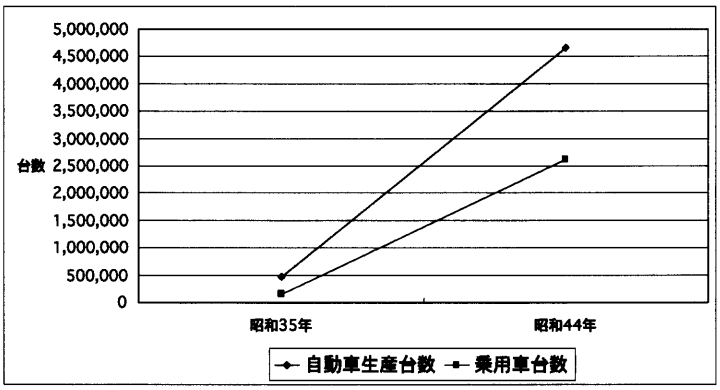


図 15　自動車生産台数とそのうちの乗用車台数

※昭和 45 年版　国民生活白書資料より作成

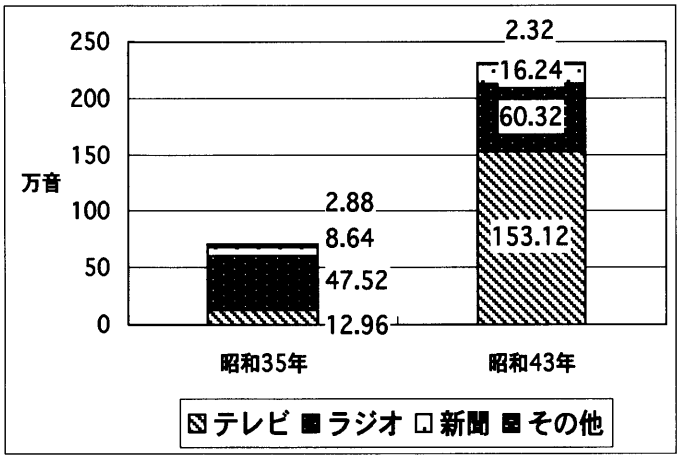


図 16　情報の供給量とその内容（１人１日当たりの平均）

※昭和 45 年版　国民生活白書資料より作成

3）祖父母の出現率にみる家族構成の変化

第Ⅰ期・第Ⅱ期・第Ⅲ期の教科書における家族構成について祖父母を描いた作品がどの程度出現しているのかという視点から分析する。

祖父母の出現率について見てみると，第Ⅰ期では 14%みられたものの，第Ⅱ期・第Ⅲ期では全く見られなくなり，その要因として核家族化が進んだ影響があると考えられる（**図 17**）。雑誌『教育美術』においては（**表 5**）第Ⅱ期では，家族が描かれている作品２点中，祖父母が描かれている作品は０点であった。第Ⅲ期については，２点中１点が，祖父母が描かれている作品であった（**図 18**）。『教育美術』については作品の母数自体が少ないため，教科書作品について述べる。以下この理由について考察していきたい。

昭和 35（1960）年と昭和 45（1970）年における家族類型別一般世帯数の推移（**図 19**）をみると [5]，小規模世帯の中でも「単独」「夫婦のみ」「夫婦と子」の割合が増加している。「単独」世帯は 10 年間で 16.1%から 20.3%に，「夫婦のみ」世帯は 7.3%から 9.8%に，「夫婦と子」世帯の割合は 38.2%から 41.2%に増加している。この中で「単独」世帯は家族とは言えないので考察の対象からは除くが，「夫婦と子」世帯の割合が増加していることから，祖父母を含む構成員が大規模な家族がこの 10 年間の間に減少し，それが子どもの表現する作品にも影響を与えたといえる。

さらに，一般世帯及び平均世帯人員の推移（**図 20**）を教科書が出版された年度との関連でみると [6]，昭和 35（1960）年から昭和 48（1973）年にかけて，世帯総数は増加しているが，平均世帯人員は減少している。昭和 35（1960）年に 4.1 人であった平均世帯人員は，10 年ほどの間に 3.33 人にまで減少した。このことから，いわゆる核家族化が実際に進行していたことが読み取れた。この要因としては，小規模世帯の増加が考えられる。

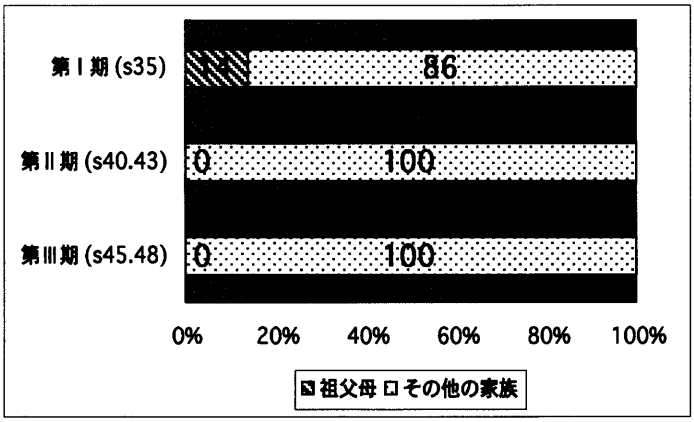


図 17　教科書作品における祖父母の出現率

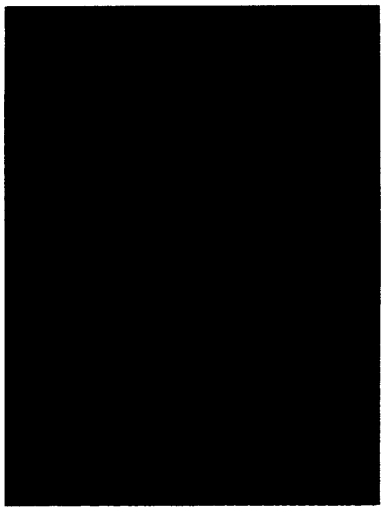


図 18　昭和 45 年『教育美術』4 年生作品
祖母の横顔を描いた場面。

表 5　美術教育雑誌ににおける祖父母の割合

	教育美術
第Ⅱ期　(S40, S43) (1965～1969)	0/2
第Ⅲ期　(S45, S48) (1970～1976)	1/2

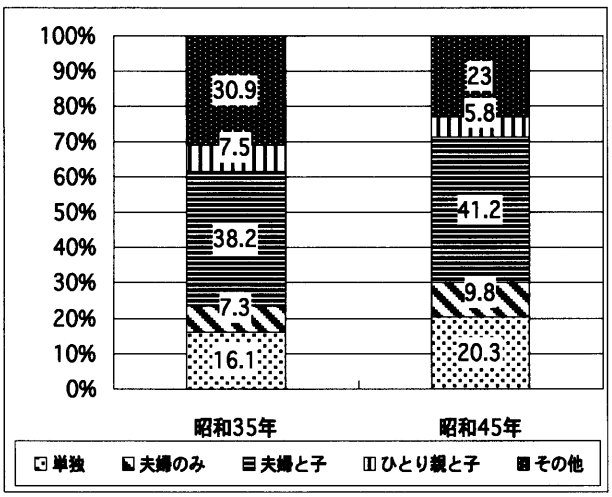


図 19　一般世帯及び平均世帯人員の推移
※『国民生活統計年報』の資料を基に作成

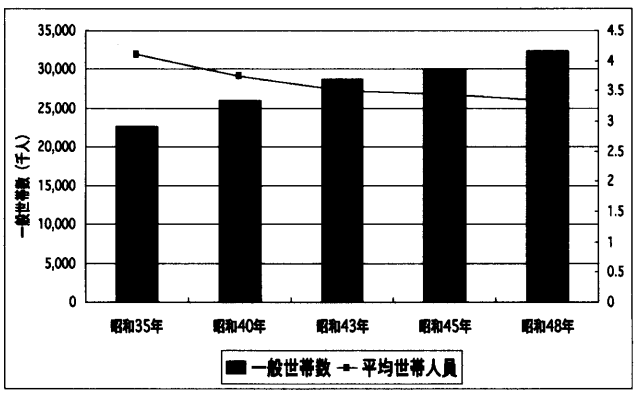


図 20　家族類型別一般世帯数の推移
※国土交通省ホームページ資料より作成

4）家事労働の出現率の変化

第Ⅰ期・第Ⅱ期・第Ⅲ期の教科書における家庭内の炊事・洗濯などの家事労働の出現率をみてみると，第Ⅰ期・第Ⅱ期と比較して第Ⅲ期は，母親の家事労働の割合が増えている。第Ⅰ期・第Ⅱ期では一桁の割合であったものが，第Ⅲ期では30%近くにまで増加している（図21）。

雑誌『教育美術』においては第Ⅱ期・第Ⅲ期共に，家族が描かれている作品2点中，家事労働が描かれている作品は0点であった（表 6）。『教育美術』については作品の母数自体が少ないため，教科書作品について述べる。

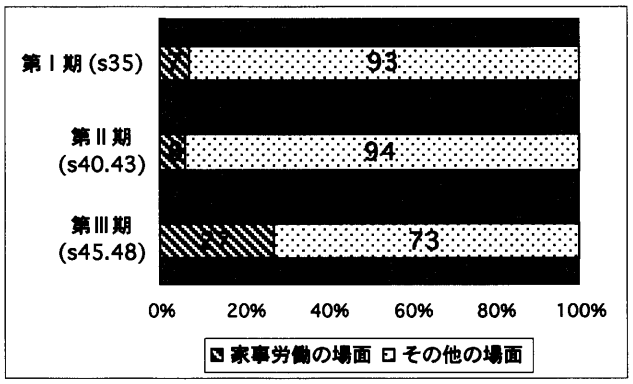


図21　教科書作品における家事労働の割合

表6　美術教育雑誌ににおける家事労働の割合

	教育美術
第Ⅱ期　(S40, S43) (1965～1969)	0/2
第Ⅲ期　(S45, S48) (1970～1976)	0/2

以下この理由について考察していきたい。

経済的発展により，家庭と職場が分離した結果，家庭の中で父親が不在になる。そのため経済がピークを迎えた第Ⅲ期では，母親の家事労働の出現率が，第Ⅰ期・第Ⅱ期に比べ増加したと考えられる。

具体的な作品を分析すると，第Ⅰ期・第Ⅱ期では，家事労働の場面として，子ども達がお裁縫をしている様子（図22）や，お手伝いをしている様子（図23, 24）が描かれていたのに対し，第Ⅲ期では，家事労働に従事する者として描かれているのは母親のみ（図 25, 26, 27）で，母親は料理や縫い物といった家事に従事している。父親については，業務に携わる姿（図 28, 29, 30）が描かれるようになっていた。

これにより，日常の家庭生活の中で父親が描かれない傾向を読み取ることができる。

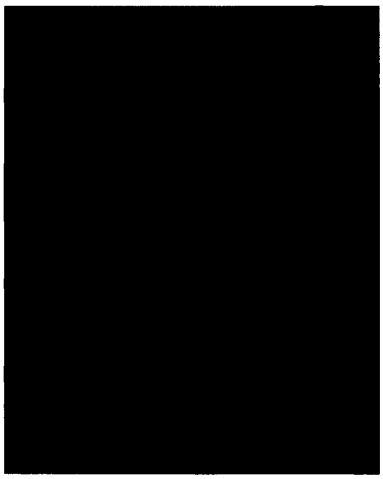


図 22　昭和 35 年『図画工作』1 年生教科書
作者と妹が，裁縫をしている場面。

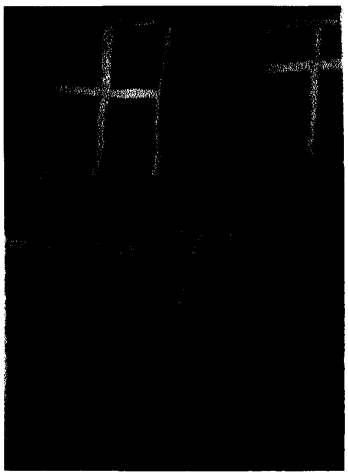


図 23　昭和 35 年『図画工作』1 年生教科書
作者が台所で母親の手伝いをしている場面。



図 24　昭和 40 年『図画工作』3 年生教科書
作者が母親の洗濯の手伝いをしている場面。

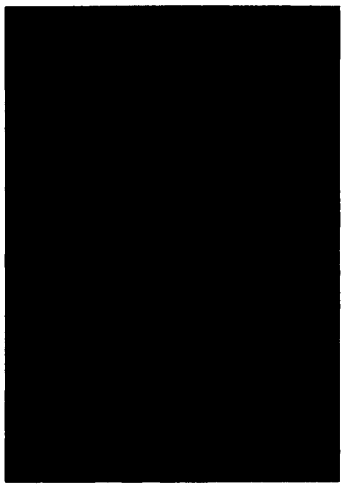


図 25　昭和 48 年『図画工作』1 年生教科書
母親が台所で調理している場面。

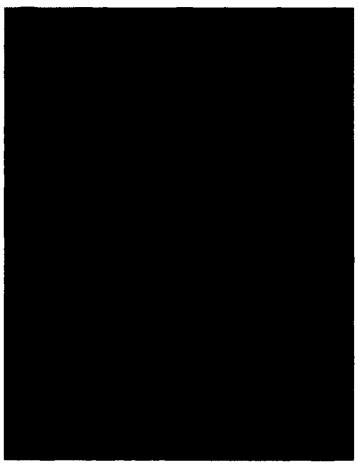


図 26　昭和 45 年『図画工作』2 年生教科書
母親が電話をしている場面。



図 27　昭和 48 年『図画工作』4 年生教科書
母親が家事の合間に，ストーブにあたっている場面。



図28　昭和48年『図画工作』4年生教科書
父親が仕事場で働いている場面。



図29　昭和43年『図画工作』1年生教科書
父親がブルドーザーを運転して，働いている場面。



図30　昭和43年『図画工作』4年生教科書
父親が海で漁をしている場面。

経済的発展により，家庭と職場が分離した結果，家庭の中で父親が不在になる。そのため経済がピークを迎えた第Ⅲ期では，母親の家事労働の出現率が，第Ⅰ期・第Ⅱ期に比べ増加したと考えられる。

調査した「高度経済成長・住宅の大量供給時代」の教科書・美術教育雑誌における子どもの造形表現の分析・検討をまとめると以下のようなる。

- 第Ⅰ期・第Ⅱ期に比較して，第Ⅲ期は家族の出現頻度そのものが減少していること。
- 第Ⅰ期に比較して，第Ⅱ期・第Ⅲ期は家族の生活空間（住居・仕事場）以外の公共的空間での出現が増加していること。
- 子どもの造形表現の中でも核家族化が見られること。
- 第Ⅲ期では，父親が日常の家庭生活に登場しない傾向があること。

5）住空間の変容にみられる家族像

戦後，農村の家長制家族の分解が起こり，結果として地方都市から大都市圏への若年労働者の大移動が起こった。その事が都市の単身者と核家族を増やした。そして全体として急速な「核家族化」を進めた。

第Ⅰ期から第Ⅲ期を通して，戦後の住宅難解消のため，耐火造の賃貸集合住宅が盛んに建設された。表にこの時代に建てられた代表的な建物を示す（**表 7**）。

表 7　「高度経済成長・住宅の大量供給時代」の代表的な建物

時代区分	集合住宅/戸建住居
第Ⅰ期 （S35）	・ 立体最小限住宅（1950） ・ 晴海高層住宅（1958） ・ 千里ニュータウン（1961） ・ 高蔵寺ニュータウン（1964） など
第Ⅱ期 （S40，S43）	・ ヒルサイドテラスA棟（1967） ・ 塔の家（1967） ・ 桜台コートビレッジ（1970） など
第Ⅲ期 （S45，S48）	・ 広島基町団地（1972） ・ 中銀カプセルタワー（1972） ・ 港北ニュータウン（1974） など

住宅大量供給
・
郊外大規模開発

以下表 7 に示した，代表的な建物について述べる。

日本住宅公団発足後，始めて建設した都市型高層住宅である『晴海高層住宅』（**図 31**）は２ＤＫの平面形式である。ＤＫ平面は，1970 年代前半までの日本の公共住宅の主流を占めていた。この平面を生み出したのは，西山卯三が提唱した，食寝分離論である。これは，食事の場所と就寝の場所を分けるというもので，そのために食堂と台所が一緒になってもかまわないというものであった。

２ＤＫの原形となったのは，『51Ｃ型住宅』（**図 32**）である。「51－Ｃ型」の計画にあたっては，以下の三点がテーマであった。

① 小住宅でも寝室は 2 部屋以上確保すべきである。
② 食寝分離のために少なくとも朝食がとれるような台所とする
③ バルコニーや行水や洗濯のできる場所，物置，水洗便所といった生活を支える部分の重視。

「団地族」という言葉まで流行させた２ＤＫは，その後の集合住宅の原型をつくっていった。子どもの造形作品にも，団地などがえがかれるようになる（**図33，34，35**）。

『晴海高層住宅』（1958 年）は，３層を１単位としたスキップフロア型の集合住宅である。スキップフロア型の集合住宅とは，住棟入口から階段またはエレベーターを使用し，廊下から各住居にアクセスする形式である。階段やエレベーター周辺が井戸端会議の場になったと想像できる。住居が積層する集合住宅においては，通路空間やアクセスの方法を工夫する必要があり，そのつくり方が近隣住民とのコミュニケーションのとり方にも影響を与えると考えられる。

第Ⅱ期には，居間を確保した「公私室型」の平面[7]が主流になってくる。『桜台コートビレジ』（1970 年）はＲＣ造２～６階建の中高層の集合住宅である（**図36**）。これは「ペアシティ計画」という，田園都市線沿線の住宅地開発であった。

都心に住みたいという要求を満たすための，東孝光の『狭小地住宅』（1967年）（**図 37**）は，６層の空間を縦に重ねたものであった。

『広島基町団地』（1972 年）年は，スラム化していた木造住宅居住地区の建て替えを目的として，８～20 階建ての高層高密度の集合住宅として計画された。ここでも『晴海高層住宅』と同様にスキップフロア形式を採用している。

『中銀カプセルタワー』（1972 年）は都市型集合住宅の先駆例である（**図 38**）。都心の商業地区内に立地するセカンドハウス機能とホテル機能を備えている。

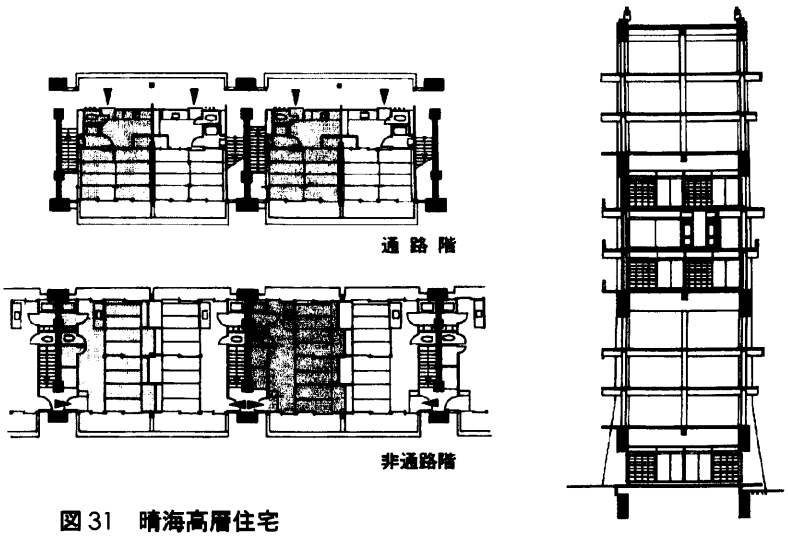


図 31　晴海高層住宅
設計者：前川国雄
　　日本住宅公団
※設計資料集成より

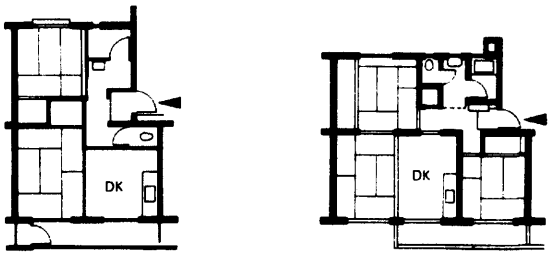


図 32　51C 型住宅の平面
※設計資料集成より

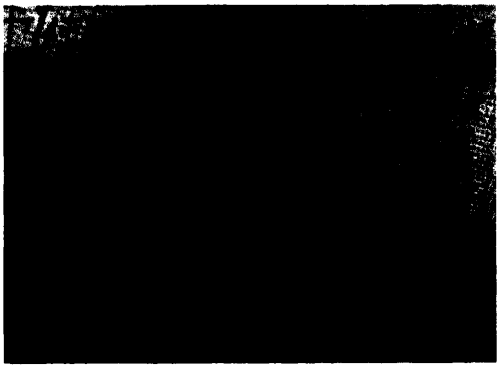


図 33　昭和 40 年　『教育美術』
幼稚園生の作品
団地の風景。



図 34　昭和 38 年　『教育美術』
3 年生の作品
分譲地づくりの風景。



図 35　昭和 42 年　『教育美術』
1 年生の作品
団地の風景。

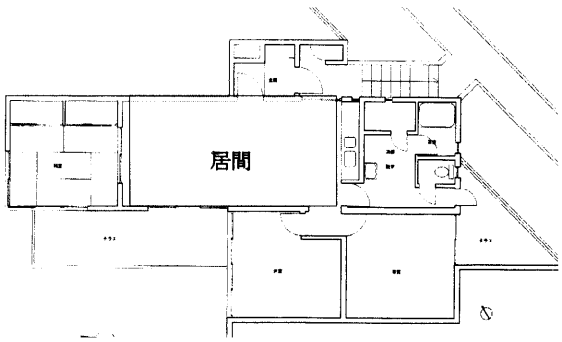


図 36　桜台コートビレッジ
設計者：内井昭蔵
※新建築より

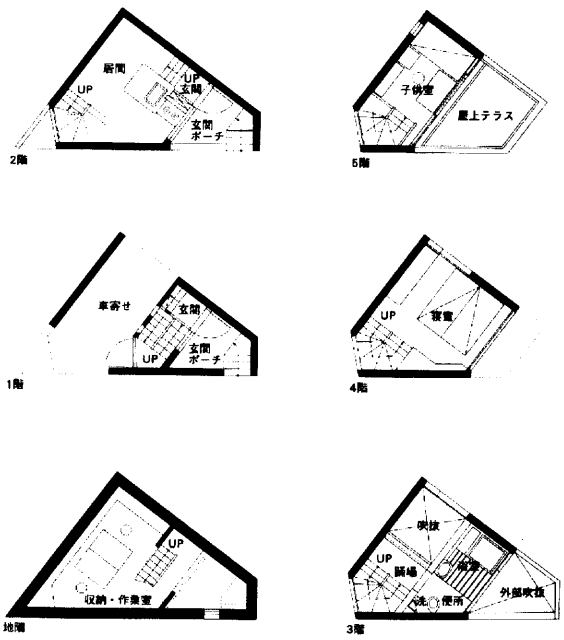


図 37　塔の家
設計者：東孝光
※図説　日本の「間取り」より

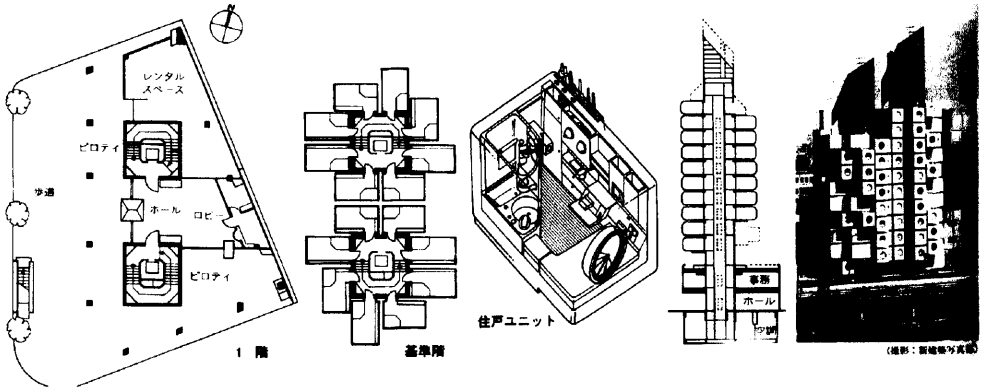


図38　中銀カプセルタワー
設計者：黒川紀章
※設計資料集成より

これらの建物の傾向からは，次の三点の特徴が指摘できる。

一つめとして，この時期の住宅の大きな特徴として，２ＤＫ平面の登場ということがある。集合住宅の原型をつくった２ＤＫは，戦後の日本人の生活を大きく変えた一つの要因であると考えられる。ダイニング・キッチンの登場はこれまでの台所のあり方を変えた。２ＤＫ平面の登場は家事の軽減を図るための間取りの変化であり，同時に核家族化も促した。また，この頃からステンレス流し台がブームとなった。これは，家事労働が省略化・軽減化された一つの要因になっている。

二つめとして，第Ⅱ期にみられるような「公私室型」の平面により居間が確保されることになり，家族が集まって団欒する場として，住宅の中では「居間」が中心に考えられるようになった点である。

三つ目として，校外の団地やニュータウンが多数建設されたという事は，これまでのような地域密着型の人付き合いではなく，新たな知らないもの同士の人間関係を構築していかなければならなかったと推察される。そして，そこに集まるのは多種多様な人たちというよりは，似たような経済状況や職業の人達であっただろうと考えられる。

居住施設について，まとめると以下のようになる。

- 第Ⅱ期以降，食事の場所と就寝の場所を分けた食寝分離の形式の住居が主流になり，台所に新たな価値が生まれた。
- ２ＤＫは，その後の集合住宅の原型をつくっていき，家事の軽減をもたらした。
- 第Ⅱ期の高度経済成長期には，居間を確保した「公私室型」の平面が主流になり，居間が家族の中心になった。
- 校外の団地やニュータウンが多数建設され，新たな人間関係が生まれた。

6）考察

家族の出現頻度の減少は，高度に経済が進行するに伴って，各家庭の生活・労働スタイルが変わり，家族全員での団らんや食事をするという機会が減ったことや子どもの関心・興味が多方面に広がったということが考えられる。そのことは，第Ⅰ期に比較して第Ⅱ期・第Ⅲ期に遊園地，サーカス，海水浴場といった家族の生活空間以外の公共空間での表現が増加していることからもいえる。この公共空間の出現を後押ししたものは，新たに整備された交通網や都市化が進んだこと，それに伴い移動手段が増加したこと，移動時間が短縮化されたことが要因としてある。「三種の神器」の一つである乗用車の保有台数が増えたことから，家族単位でのレジャー施設などへの移動も容易になったと考えられる。加えて，テレビなどのマスメディアの情報が与えた影響もあると思われる。映像化・視覚化された情報は家庭内にも刺激をもたらし，テレビで育つ子どもが増えるとともに，視覚的な刺激を求める子どもも以前と比較して増加したとも考えられる。

第Ⅲ期に見られる，父親の不在傾向は，1960 年代からの、国民所得倍増計画発表に伴い，雇用体系の変化や父親のサラリーマン化がおこり，この現象をうけてのものとも読み取ることができる。また，母親の家事労働しかみられないということから，子どもが手伝いをしなくなったという傾向が見出せる。父親が外に働きにでかけ，家庭内には母親が残ったという結果が考えられる。

また，祖父母ともに，第Ⅱ期・第Ⅲ期には出現が見られなくなり，核家族化の進行の影響が見られた。このことにより，大人数での一家団らんもみられなくなってきた。そういったことが子どもの造形表現にも影響していると考えられる。

さらに，家族と学校が地域から子どもを隔離し，囲い込んできたという実態，つまり戦後の経済発展のなかで，子どもが私的な「核家族」の中に囲い込まれて，地域社会との連携を薄めていった実態が，子どもの造形表現に影響を与えたのかについては，家庭外でのレジャー・余暇施設第Ⅰ期と比較して，第Ⅱ期・第Ⅲ期に入ると多く描かれ，活動が祭礼等の地域的行事が減少していることから，地域社会との関係が希薄化した傾向を読み取ることができる。

住居平面にもまた，「核家族化」の影響が表れていた。ダイニング・キッチンやステンレス流し台が，文化的な生活のシンボルとなり，家庭内に残った母親は住居の中でも，中心となる場所を与えられたことになる。一方で父親は，家庭内では不在となり，住居平面でも父親の居場所は夫婦の寝室と，居間ということになる。この時代は祖父母とは別に暮らすことが主流になったと推察されるので，やはりここでも家族全員が集まる場所である居間が大切になってくる。居間で団欒している様子は，子どもの造形表現にはあまり描かれていなかったが，その変わりレジャー施設が家族の団欒の場として，大きな位置を占めていることがわかった。

以上のことから，各家庭の生活・労働スタイルの変化が子どもの造形表現と

住居にも影響を与えていることが分かり，家族像の変化を読み取ることが出来た。また，逆に言えば，住居形式の変化が家族のライフスタイルを変えたとも言える。

調査した「高度経済成長・住宅の大量供給時代」における分析・検討の結果をまとめると以下のようなる。

- 第Ⅰ期・第Ⅱ期に比較して，第Ⅲ期は家族の出現頻度そのものが減少していること。
- 第Ⅰ期に比較して，第Ⅱ期・第Ⅲ期は家族の生活空間（住居・仕事場）以外の公共的空間での出現が増加していること。
- 子どもの造形表現の中でも，住居平面の中にも，核家族化が見られること。
- 第Ⅲ期では，父親が日常の家庭生活に登場しない傾向があること。
- 家族の団欒の場としてレジャー施設が，大きな役割を果たしていること。

（1） 経済の低迷期・需要の個別化時代

1）家族の出現数の変化

第Ⅰ期・第Ⅱ期・第Ⅲ期の教科書における家族の出現率について調査すると，第Ⅰ期と比較して，第Ⅱ期では家族の出現率が減少していることがわかる。また，第Ⅲ期の始めの年に急激な増加がみられる。そして、その年以降の教科書はまた，減少傾向にある（**図 39**）。

雑誌『教育美術』においても，第Ⅰ期から第Ⅱ期にかけて，急激に家族が描かれる数が減少している（**図 40**）。

第Ⅱ期での，家族の出現率の減少は，バブル経済の下，時代が豊かになり，家族だけでなく，多方面に国民の関心が移ったからだと推察される。

第Ⅲ期にみられる，急激な家族の出現率の増加は，バブル経済が崩壊し，時代が不安定になり，心のよりどころを，また家族に求めていった結果であるとも考えられる。しかし，それも一時的なもので，やがてはまた減少していく。

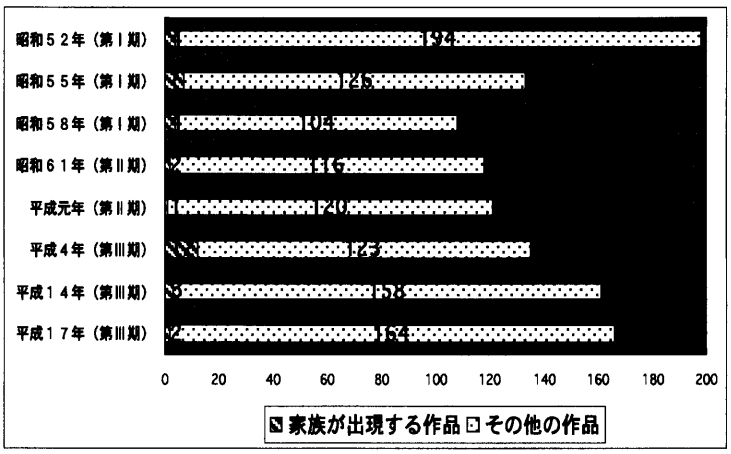


図 39　教科書作品における家族の出現数

※小学校の各改訂年でみた全学年にわたる作品点数とその内訳

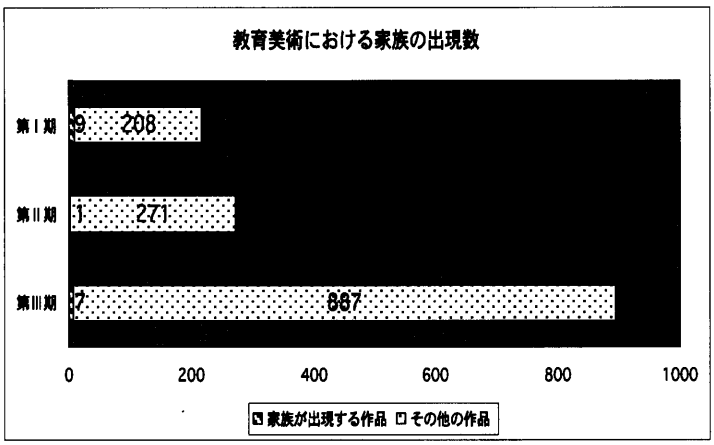


図 40 雑誌『教育美術』における家族の出現数

※小学校の全学年にわたる作品点数とその内訳

2）公共空間の出現率の変化

第Ⅰ期・第Ⅱ期・第Ⅲ期の教科書における生活空間を，住居・仕事場とそれ以外の公共空間の出現する割合を，**【住居・仕事場が描かれている作品点数/家族が描かれている作品点数】**という観点でみていくと，第Ⅰ期・第Ⅱ期に比較して，第Ⅲ期では，家族の生活空間（住居・仕事場）が全く描かれなくなり，公共空間のみになっていることがわかる。雑誌『教育美術』においても，同様にみていくと，第Ⅱ期以降では描かれる割合が少なくなっている（**表 8**）。

表 8 教科書・美術教育雑誌における住居・仕事場の割合

	図画工作教科書	教育美術
第Ⅰ期 (S52, S55, S58) (1977～1985)	5/13	5/9
第Ⅱ期 (S61, H元) (1986～1991)	1/3	1/1
第Ⅲ期 (H4, H17) (1992～2005)	0/17	2/6

第Ⅰ期では，高度経済・大量生産時代の第Ⅲ期にひきつづき，つりをしている様子（**図 41**）やロープウェーや車で遊びに行く様子が描かれている（**図 42, 43**）。レジャー施設へ家族と遊びに行くことが第Ⅰ期では主流であったことがわかる。

第Ⅱ期に入ると公共空間として新たに，ショッピングセンターなどが登場するようになる（**図 44, 図 45**）。その傾向は『教育美術』でもみられ，第Ⅲ期ではショッピングセンターだけが描かれているものも多くみられた（**図 46, 図 47** ※この作品は家族が直接描かれている作品ではない）。他にも，回転寿司での食事の様子などが描かれるようになっていた（**図 48**）。



図 41　昭和 52 年『図画工作』3 年生教科書
作者が休日に釣りをしている場面。



図 42　昭和 52 年『図画工作』4 年生教科書
作者が休みの日に家族とロープウェーに乗って遊びに行く場面。

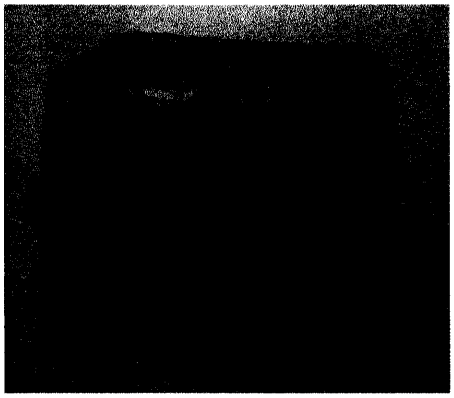


図 43　昭和 52 年『図画工作』2 年生教科書
父親が海で漁をしている場面。

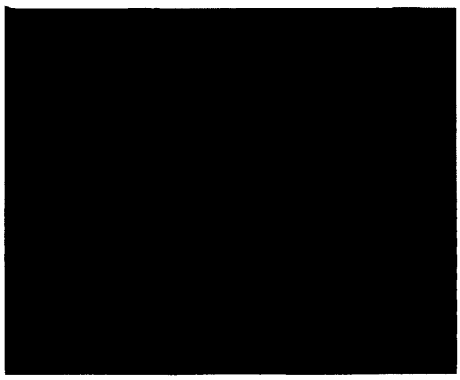


図 44　昭和 61 年『図画工作』2 年生教科書
作者と妹と母親で小鳥を買いにきた場面。



図 45　平成 4 年『図画工作』2 年生教科書
作者がディスカウントショップに買い物にきた場面。

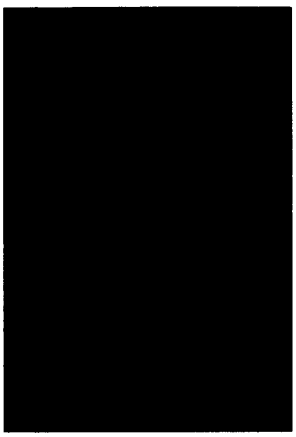


図 46　平成 11 年『教育美術』4 年生作品
行ってみたいショッピングセンターを描いた場面。

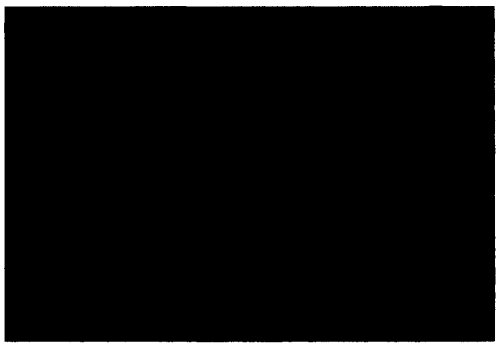


図 47　平成 11 年『教育美術』4 年生作品
町のショッピングセンターを描いた場面。



図 48　平成 6 年『教育美術』4 年生作品
回転ずし店に父親と訪れている場面。

3）祖父母の出現率にみる家族構成の変化

祖父母の出現率について見てみると，第Ⅰ期・第Ⅱ期には祖父母を描いている作品は全く見られなく，第Ⅲ期では家族が描かれている 17 作品中，4 作品に祖父母が描かれていた。割合としては 24%であった（**図 49**）。

『教育美術』においても同様に，第Ⅰ期・第Ⅱ期ともに全く描かれていなかった。第Ⅲ期では家族が描かれている 7 作品中 1 点が祖父母の作品であった（**図 50**）。割合としては 14%であった。

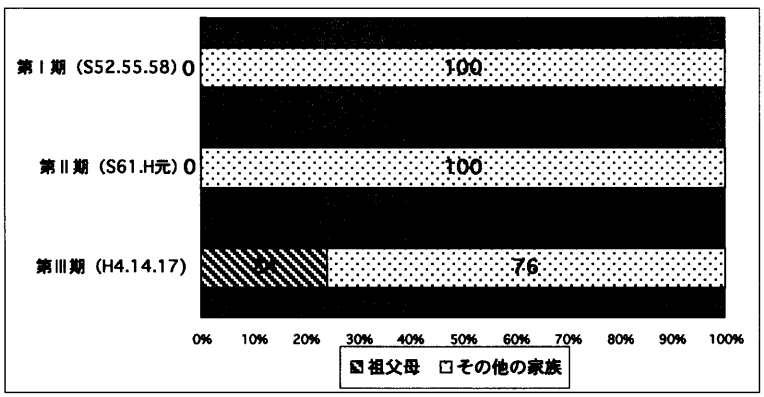


図 49　教科書作品における祖父母の出現率

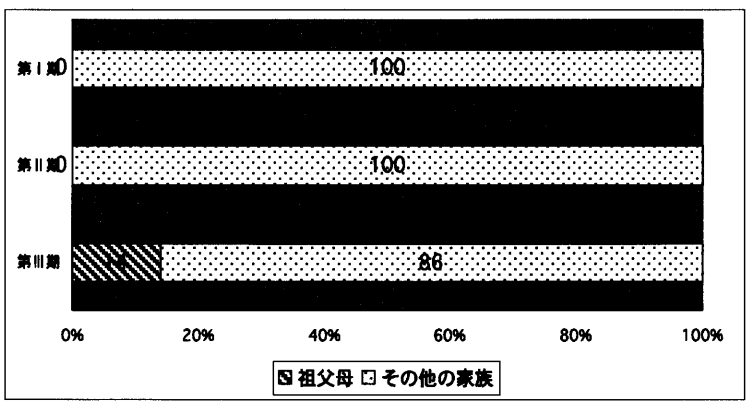


図 50　雑誌『教育美術』における祖父母の出現率

祖父母が描かれる割合が増加した要因として高齢化が急速に進んだ影響があると考えられる。65 歳以上人口が総人口に占める割合 [8] は右肩上がりで増加している（図 51）。

教科書において，描かれている場所は，家庭内で祖父母が描かれている場合は全くなく，医療施設や老人福祉施設に限られている（図 52，53）。このことは，従来は家庭が担ってきた介護機能を社会や市場が担うようになってきたことを意味していると考えられる。これは家族のあり方の大きな変化だといえる。一方，『教育美術』においては，どんな場面で祖父母が登場しているかというと，農園での様子が描かれていた（図 54）。

一般世帯数と平均世帯人員の推移 [9] は，「高度経済・大量消費時代」と同様に世帯数が増えているにも関わらず，平均世帯人員は減少している（図 55）。核家族や単身世帯が依然増加傾向にあるということである。また，老後の住まい方として [10] 自宅以外の施設を望んでいる人が，33.3%いるという結果が出ている（図 56）。

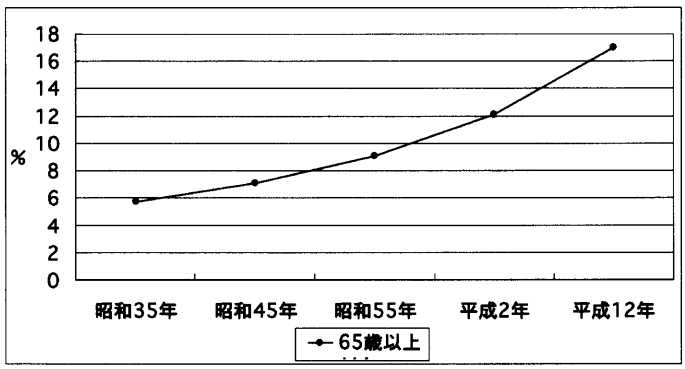


図 51　65 歳以上人口が総人口に占める割合

※平成 6 年版　国民生活白書より

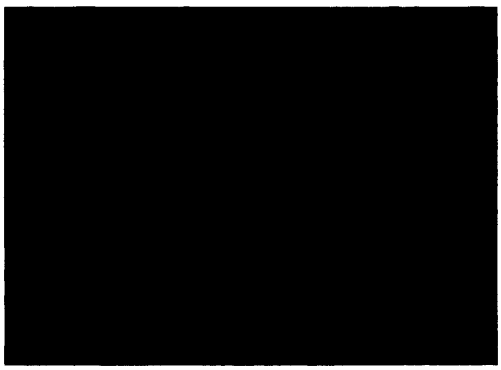


図 52　平成 14 年『図画工作』5・6 年生教科書

祖父母が医療福祉施設にいる場面。

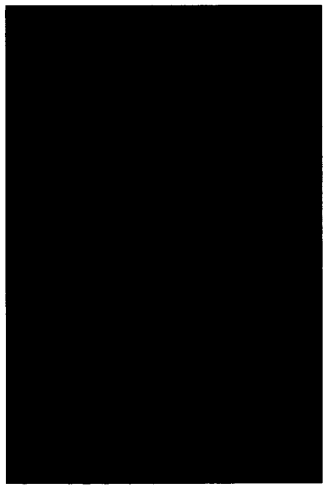


図 53　平成 17 年『図画工作』3・4 年生教科書

作者が祖父の車椅子をおす場面。



図 54　平成 11 年『教育美術』6 年生作品
祖父が柿をむいてくれている場面。

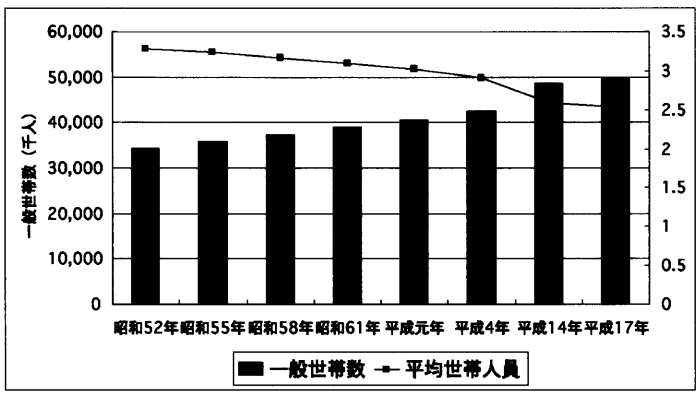


図 55　一般世帯数と平均世帯人員の推移

※財団法人国土地理協会「住民基本台帳人口要覧」による

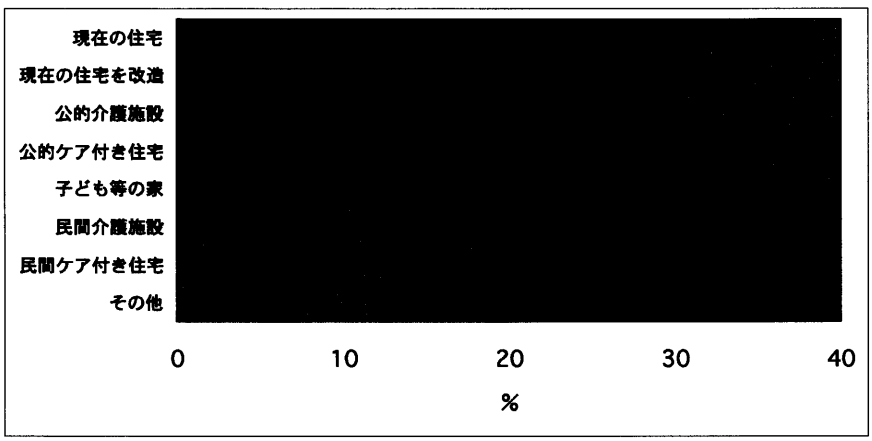


図 56　高齢者の老後の住まい方に対する意識調査

※平成 13 年版　国民生活白書より

4）家事労働の出現率の変化

第Ⅰ期・第Ⅱ期・第Ⅲ期の教科書における家庭内の炊事・洗濯などの家事労働の出現率を**【家事労働が描かれている作品点数/家族が描かれている作品点数】**という観点でみてみると，第Ⅰ期では家族が描かれている作品 13 点中，

家事労働は全く描かれていなかった。第Ⅱは，家族が描かれている作品が３点しか出てきていないうちの，１点が家事労働であった。第Ⅲ期では，17 点中 1 点に家事労働が描かれていた。全体として家事労働がほとんど描かれていなかった。『教育美術』における家事労働の出現率についても，第Ⅰ期から第Ⅲ期にかけてほとんど描かれていないと言える。第Ⅱ期・第Ⅲ期ともに全く出てこなかった。(**表 9**)

教科書においては，母親が柿をむいている場面（**図 57**）や母親が台所で料理をしている場面（**図 58**），が描かれていた。

『教育美術』においては，母親が織物をしている場面（**図 59**）や，母親がアイロンがけをしている場面（**図 60**），母親が台所で料理をしている場面（**図 61**）などが描かれていた。いずれの作品も描かれているのは母親単独であった。

表 9　教科書・美術教育雑誌における家事労働の割合

	図画工作教科書	教育美術
第Ⅰ期　(S52, S55, S58) (1977～1985)	0/13	4/9
第Ⅱ期　(S61, H 元) (1986～1991)	1/3	0/1
第Ⅲ期　(H4, H17) (1992～2005)	1/17	0/6

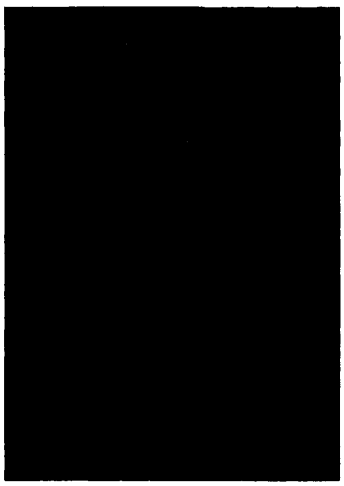


図 57　昭和 61 年『図画工作』6 年生教科書
母親が柿をむいている場面。

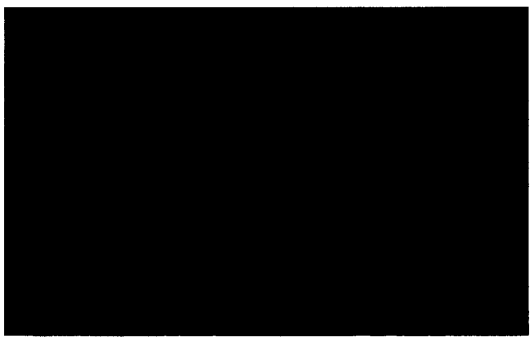


図 58　平成 4 年『図画工作』1 年生教科書
母親が台所で料理をつくっている場面。



図 59　昭和 52 年『教育美術』5 年生の作品
母親が織物をしている場面。



図 60　昭和 55 年『教育美術』6 年生の作品
母親がアイロンがけをしている場面。

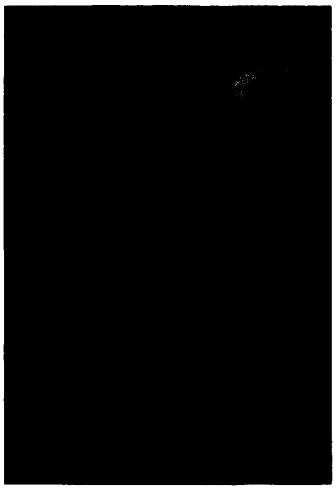


図 61　昭和 60 年『教育美術』3 年生の作品
母親が台所で料理をしている場面。

以下この理由について考察していきたい。

高度成長期以降，1980 年代前半までは，普通のサラリーマンと結婚してもある程度生活水準の上昇を望めたこともあり，女性の生き方は，専業主婦化することが多数派であった。しかし専業主婦化しているのにも関わらず，第Ⅰ期では家事労働が全く描かれていない。

第Ⅱ期以降家事労働がまた描かれるようになっているが，第Ⅱ期では，家族が描かれている作品が３点と，極めて少なく，そのうち一点だけが母親の描かれている作品であった。そして，このことを考慮すると，第Ⅱ期に描かれたものは，実際は，数値でみるほど大きい割合として捉えることができない。

雑誌『教育美術』において第Ⅰ期からⅢ期までを通して，ほとんど家事労働が描かれていなかったことからも，全体的に家事労働自体が描かれなくなったと言える。つまり家事そのものをあまりやらなくなったという傾向を読み取る

ことが出来る。また，家事労働をしているのは母親のみであった。

第Ⅱ期の始め，昭和 61（1986）年に男女雇用機会均等法が施行されて以降，女性も総合職として働くという生き方が奨励されるようになる[11]。また，フリーターや派遣社員といった，新たな働き方も登場し始める。日本における既婚女性の就業の割合によると（**図 62**），第Ⅰ期から第Ⅲ期にかけて既婚女性が働く割合は増加している。しかし，第Ⅱ期において，女性の社会進出がみられる一方で，総理府が昭和 61（1986）年に行った調査では，9割は「家事は妻の役割とする」と答えている。このことから，まだ家事は母親の仕事だとする考えが一般的であったことが分かる。それが子どもの表現にも表れているのではないだろうか。また，第Ⅲ期は経済的にみても，バブルが崩壊して夫婦共稼ぎでなければ生活が苦しい家庭が増加した。その結果既婚女性の就業の割合も増加したと考えられる。また，第Ⅱ期に，キャリアウーマンとして働き始めた女性達が第Ⅲ期で 30 代，40 代になり母親になっているので，この世代の女性は働くことがあたりまえだと考えている割合が高いと推察される。よって第Ⅲ期で，母親は共働きで子どもを育てている場合が多いと考えられる。しかし，依然として家事労働の場面に描かれているのは母親のみである。

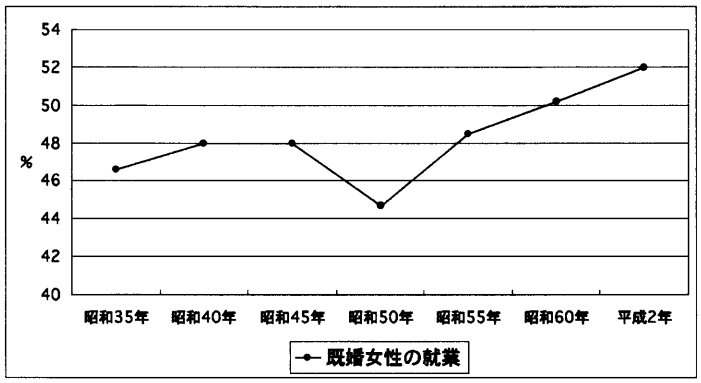


図 62　日本における既婚女性の就業の割合

※　平成４年版　国民生活白書より

調査した「経済の低迷期・需要の個別化時代」の教科書・美術教育雑誌における子どもの造形表現の分析・検討をまとめると以下のようになる。

- 第Ⅱ期は家族の出現頻度が，全体として少ないこと。
- 第Ⅰ期・第Ⅱ期では，変化がなかった住居・仕事場での家族の出現が，第Ⅲ期では家族の生活空間（住居・仕事場）以外の公共空間での出現のみになっていること。
- 第Ⅲ期で，祖父母の出現率の大幅な増加があること。
- 女性の社会進出の影響があること。
- 家事労働は依然として，女性の役割であること。
- 家事自体あまり行われなくなったこと。

5）住空間の変容にみられる家族像

1970 年代に入ると，住宅戸数の充足に伴って住居水準の向上が求められ，集合住宅の質に大きな変化がみられるようになる。表にこの時代に建てられた代表的な建物を示す（**表 10**）。

表 10　「経済の低迷期・需要の個別化時代」の代表的な建物

時代区分	集合住宅/戸建住居	
第Ⅰ期 （S52，S55，S58）	・ ライブタウン浜田山（1977） ・ タウンハウス諏訪（1978） ・ ハウスメーカーの二世帯住宅　「DUO」（1980） ・ 六甲の集合住宅（1983） ・ ユーコート（1985）　など	住宅水準の向上 ・ 社会の変化に対応する集住タイプ
第Ⅱ期 （S61，H 元）	・ ベルコリーヌ南大沢（1990） ・ 熊本県営保田窪一団地（1991） ・ NEXUS（1992） ・ グランディオーズ山手　など	
第Ⅲ期 （H4，H14，H17）	・ ヒルサイドテラス 6 期（1992） ・ Mポート（1992） ・ コモンシティ星田（1993） ・ NEXT21（1993） ・ アーベイン川崎南大塚（1997） ・ 世田谷区営深沢住宅（1997） ・ 真野ふれあい住宅（1997） ・ ハウスメーカーの提案住宅　「未来設計図」（2000） ・ 東雲キャナルコート（2002） など	

以下表 10 に示した，代表的な建物について述べる。

第Ⅰ期では『ユーコート』（1985 年）に代表されるようなコーポラティブ住宅が多く建てられるようになった（**図 63**）。コーポラティブ住宅とは，「住宅の建設・供給面において，コーポラティブ組織を活用した手法」[12] である。つまり，家を建てたい人が集まり，共同で家を建てようとする住まいづくりの方法である。一般的に集合住宅への手法であると考えられている。これは，生活スタイルの多様化により，個々の暮らしに合った住まいが欲しいと望む人が増加

したことや分譲住宅などでは納得できるような住居がないといったことが背景にある。『ユーコート』の多様な住戸平面からは住み手のそれぞれの生活が反映されていることが読み取れる。例えば，中庭やつづきバルコニーといったところから，住民同士の繋がりを大切にしていることがわかる。

一方分譲市場では 1980 年代前後に，タウンハウスが流行する。タウンハウスとは，自然環境の重視・安全な交通・オープンスペースと共同施設を実現させることを基本理念として合理的に計画された低層集合住宅である。共用のスペースをとることにより，近隣との交流の機会を多くさせる効果が期待できる。『タウンハウス諏訪』(1978 年) を例に挙げると，複数住棟の共用の庭をもち，共用庭に居間・食事室を向けている。また，雁行配置により住戸の独立性を高めている。そして，共用庭からアプローチするコモンアクセスの方式をとっている (**図 64**)。

第Ⅱ期に入ると，バブル経済により地価が高騰した。住宅価格が上昇し，サラリーマンのタウンハウス購入が難しくなった。また，1980 年代頃から，「プレハブ住宅」と呼ばれた住宅が次第に影を潜めて行く。これは，需要者のニーズとのズレがでてきたからである。つまり，文化的な価値をもつような，ステータスシンボルであるような家が求められるようになったという事である。そこでハウスメーカーは「○○の家」といった名前やキャッチフレーズをつけ，商品的な価値を持たせ，間取りの提案を重視するようなプレハブ住宅を提案するようになる。これは現在までつづいている状況である。

また，『ベルコリーヌ南大沢』(1990 年) のような，マスターアーキテクト方式によって建てられた住宅も登場した。マスターアーキテクト方式とは，団地全体のコンセプトとマスタープランを担当する建築家 (内井昭蔵) と各ブロックの設計を担当する建築家がデザインコード [13] により，住棟の設計内容を調整し，団地全体との相互関係を考慮しながら団地全体をつくり上げていく方式である。これにより多様な住棟配置が実現できた。

『熊本県営保田窪一団地』(1991 年) は，三つの住棟と集会室が中央広場を囲む構成になっている (**図 65**)。この中央広場は単なる空きではなく，生活の場としての積極的な意味づけがなされている。この中央広場に入るには二つのアプローチしかない。一つは，住戸内を通過する方法。もう一つは，集会所を通過する方法である。外部の人間に対しては完全に閉じたスペースになっている。居間は，中央広場の方向に開放的につくってある。また，各住戸から中央広場に降りていく階段の途中には，共用のルーフテラスが用意されている。

他にも，共用の空間をもつ建物として，『アーベイン川崎南大塚』(1997 年) がある。このマンションには子どもの遊び場がある。都心に住む子どもたちは，自由に友だちと遊んだり，走り回ったりするスペースに恵まれていない。南大塚は東京から 40 キロ圏の所であるが，それでも遊び場や緑がほとんどない。

つまり，他の多くの地域でもこのような傾向が見られるということである。このような現状から，集合住宅の中に遊び場や広場を設けようとする建物が増えていると考えられる。『コモンシティ星田』（1993 年）（**図 66**）や『Mポート』（1992 年）も居住者の為の共用空間をもつ建物である。

『ＮＥＸＴ21』（1993 年）は，環境との共生をめざした近未来型の実験的な集合住宅である（**図 67**）。ＳＩ住宅，つまりスケルトン・インフィル分離方式で建てられ，戸境壁，外壁，開口部等の位置の変更を可能としている。スケルトンは間取りを制約する壁のない柱梁構造であるので，多様な住戸形式が可能である。

『世田谷区営深沢住宅』（1997 年）は，「地域に開いた環境構成」と「高齢者等への対応」をテーマとしている。高齢者への対応として，高齢者用住戸をつなぐ空中路地や高齢者住宅サービスセンターとしてのデイルームなどを設け，人と人との共生を促すような計画がなされている。『真野ふれあい住宅』（1997 年）も高齢者向け住居を含む構成で，共同食堂や談話室，台所などを利用する住戸となっている。

『東雲キャナルコート』（2002 年）は，東京湾岸部の工場跡地に建てられた，賃貸型集合住宅である（**図 68，69，70**）。全体は六つの街区で構成されている。六つの街区を統一していくために，各街区の設計者は隣り合う街区の設計者と相談しながら設計を進めていった。１・２街区は中廊下形式を採用し，共用庭を住棟各所に配置している。また，仕事場（ＳＯＨＯ）や育児，趣味の場として利用できる「ホワイエルーム」，アネックス [14] などをもつ住戸も建設され，都市居住の一つの提案となっている。

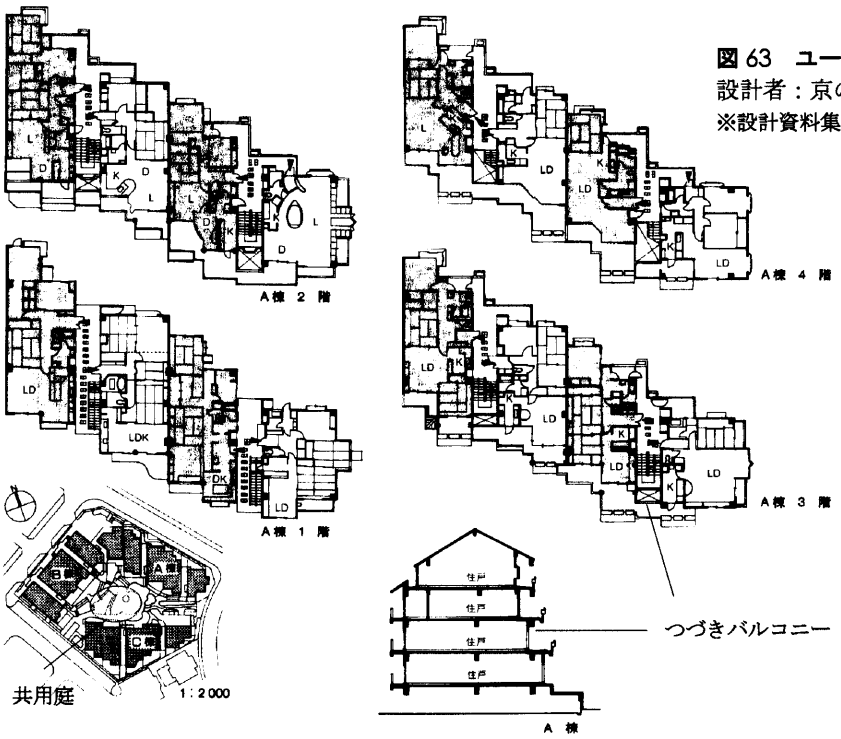


図 63　ユーコート
設計者：京の家創り会設計集団
※設計資料集成より

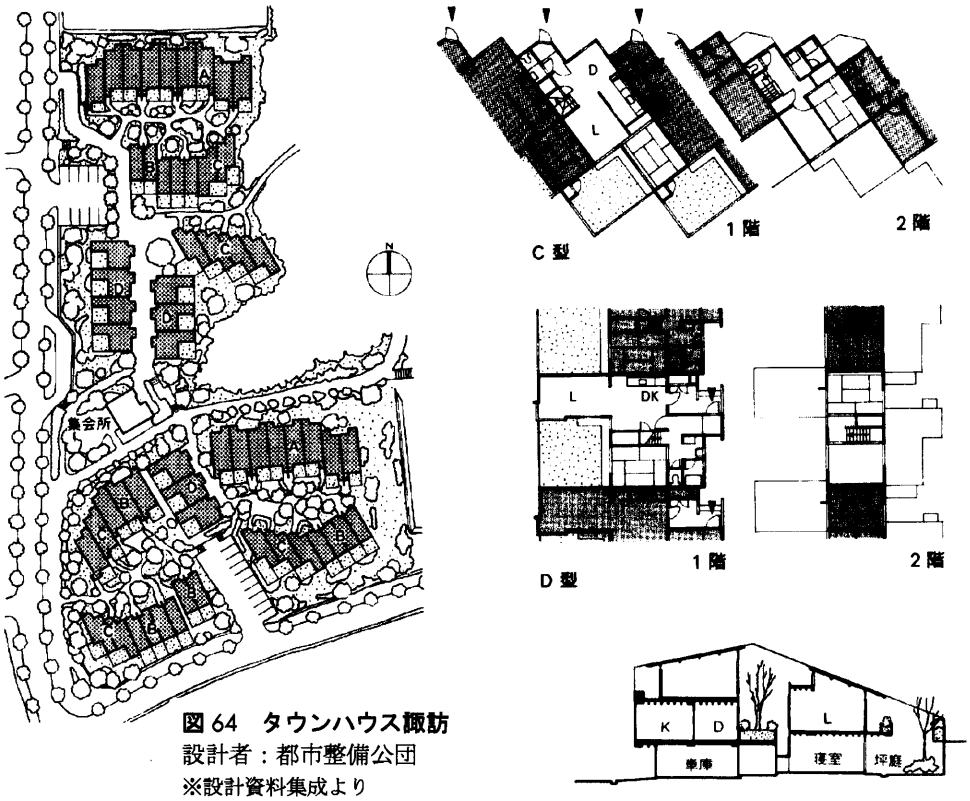


図64　タウンハウス踏訪
設計者：都市整備公団
※設計資料集成より

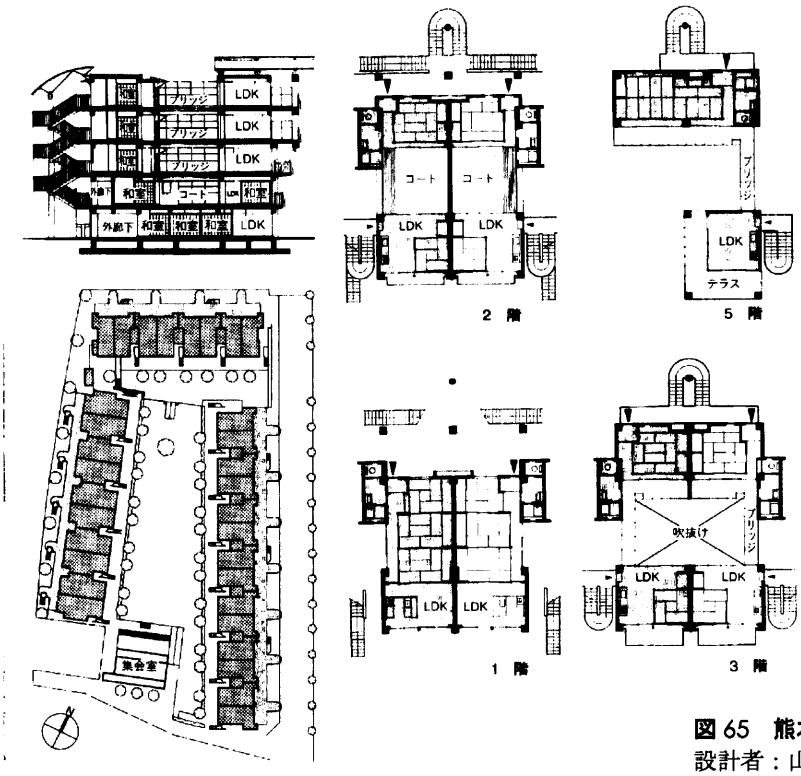


図65　熊本県営保田窪1団地
設計者：山本理顕
※設計資料集成より

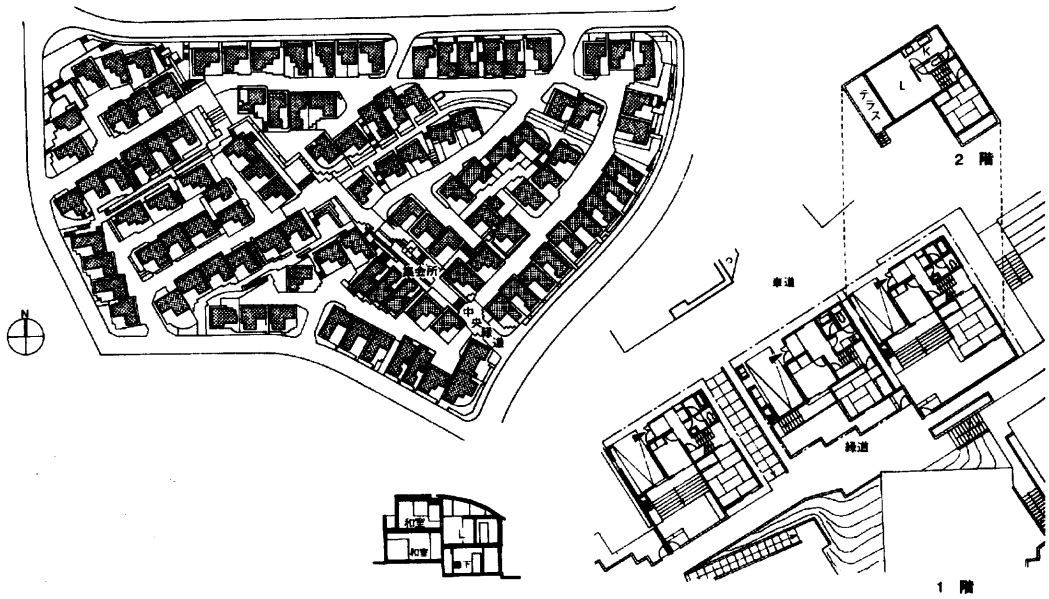
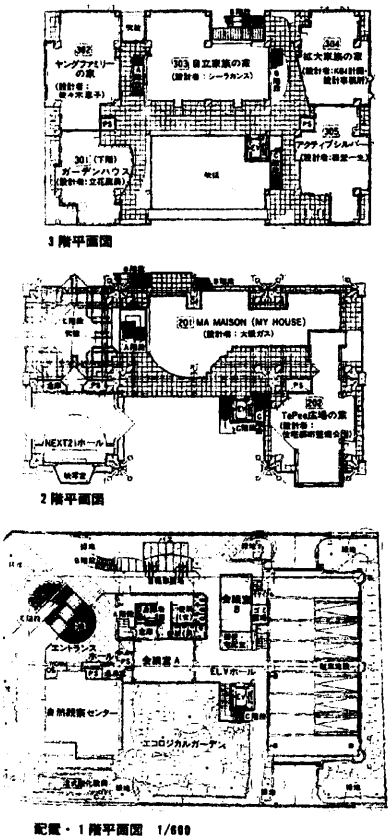


図 66　コモンシティ星田
設計者：坂本一成，加藤設計，大阪府住宅供給公社
※設計資料集成より



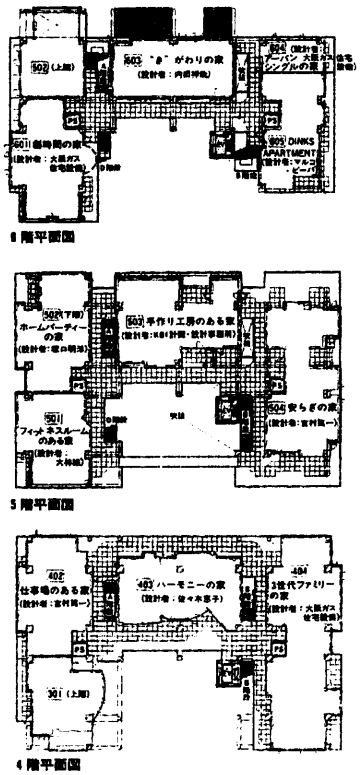


図 67　ＮＥＸＴ21
設計者：大阪ガスＮＥＸＴ21建設委員会（総括；内田祥哉，集工社建築都市デザイン研究所
※建築設計資料より

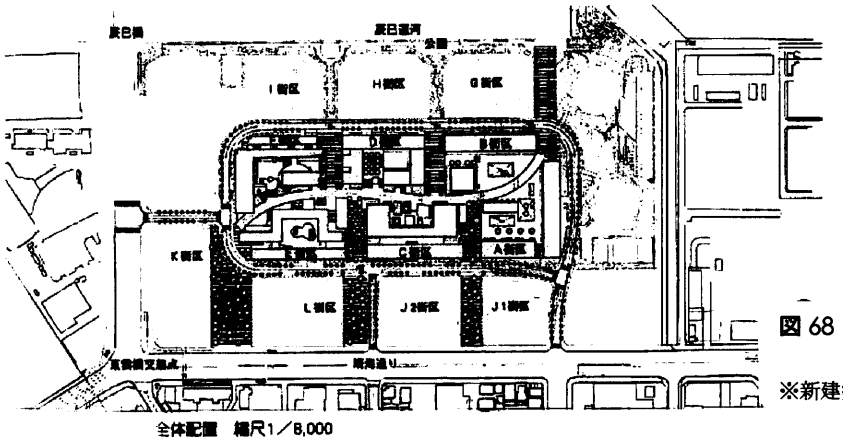


図 68　東雲キャナルコート
全体配置図
※新建築より

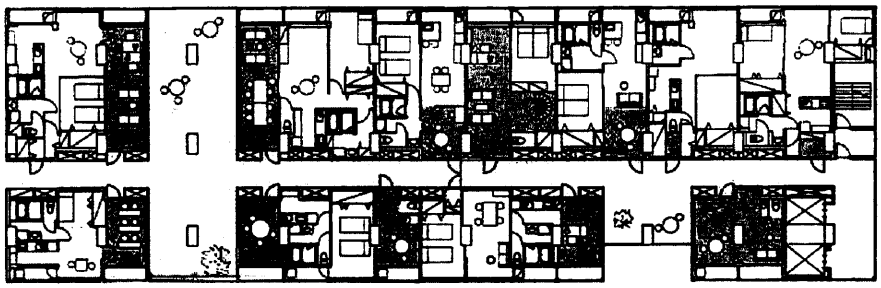


図 69　東雲キャナルコート
設計者：山本理顯
※新建築より

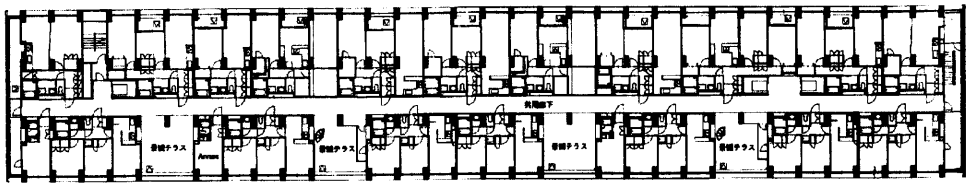


図 70　東雲キャナルコート
設計者：伊東豊雄
※新建築より

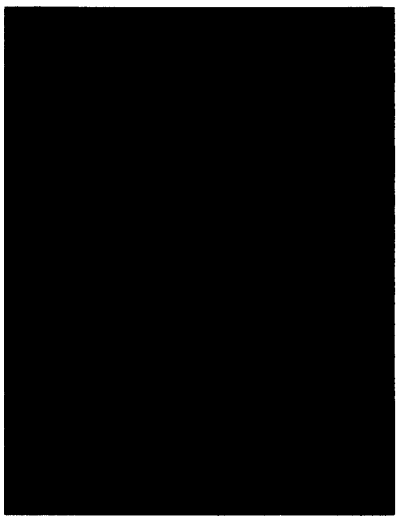


図 71　平成元年『教育美術』5 年生の作品
ビルディングを描いている。

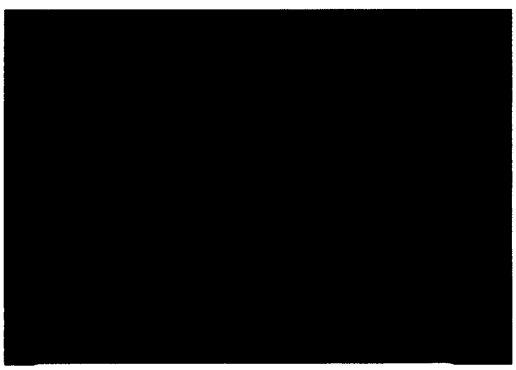


図 72　平成 6 年『教育美術』6 年生の作品
町並みを描いている。

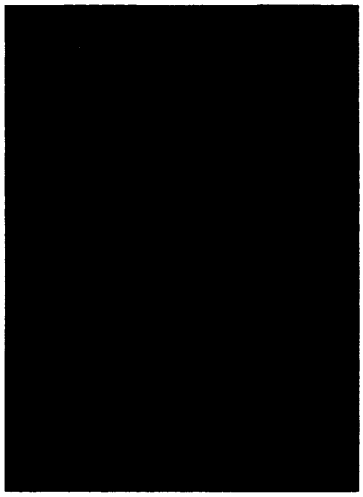


図73　平成6年『教育美術』6年生の作品
ビルを建設している様子を描いている。

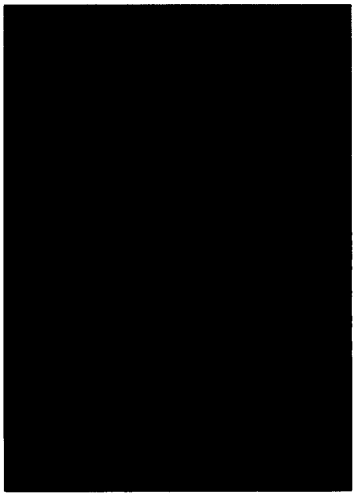


図74　平成17年『教育美術』6年生の作品
ビルディングを描いている。

これらの建物の傾向からは，次の五点の特徴が指摘できる。

一つめとして，住居に付加価値が求められるようになったということである。例えば，新たなコミュニケーションを生み出すような場が集合住宅内につくられてきたことがある。例として，空間設計が自由に出来るような，ＳＩ住居の登場などが挙げられる。

二つめとして，都心回帰の現象がみられ，高密度化，高層化が進んだということである。子どもの造形作品に描かれる建物からもそれが推察される（**図**71，72，73，74）。それに伴い都市での居住のあり方を見直す，新しいタイプの住居形式が生まれた。例えば，東雲キャナルコートはその顕著な例だといえる。

三つめとして，高齢化に伴いデイサービスを備えたようなもの，高齢者単身居住者を対象としたようなものが登場してきたということである。

四つめとして，家族の形態が多様化してきたということである。今までの標準的な家族ではなく，もっと広い枠組みで家族をとらえる必要があると考えられる。

五つ目として，空間にフレキシビリィティが求められるようになったということである。家族の構成の変化や暮らし方の変化に合わせて，自由に住宅内部も変えていけるようなものが求められている。

居住施設について、まとめると以下のようになる。

- コミュニケーションを生むような，仕掛けがつくられるようになった。；コモンスペース（共用部分）の重視

- 職住近隣や利便性重視の高層住宅が建設されるようになった。
- 人口の高齢化で高齢者単身住居が増加し，それに伴い住居も変わってきた。
- 育児や介護の外部化の影響がみられる。
- 空間が多様になった。；実験集合住宅（ＮＥＸＴ21など）の建設

6）考察

「高度経済成長・住宅の大量供給時代」からひきつづいて「経済の低迷期・需要の個別化時代」においても，家族の出現頻度は減少している。地方で，若い世代の都市への流出が起こり，大都市の都市部では，居住空間の制約により子世代との同居・近居が困難なため，核家族化が一層進んだ。都市への流出の背景は，これまでの校外の団地やニュータウンを中心にした集合住宅から，都心居住へと人々の志向が移っていったからであると推察される。この核家族化の影響に加えて，母親も仕事に従事する割合が増えて夫婦共に働く家庭が増え，家族で一緒に過ごす時間が減少したからだと考えられる。公共空間として新たにショッピングセンターや飲食店が多数描かれているのは，都市化の影響や食の外部化の影響があるであろう。商店を描いているものは家族が直接描かれているものではないが，そこを訪れた際には家族が同行していると考えられる。つまり，家族の集まる場所としてこれらの場所が大きな位置を占めていることになる。

第Ⅲ期に，祖父母が描かれる割合が増加した要因については，メディアが高齢化について取り上げる機会が増加し，子どもたちもその影響を受けたということ，また，教育現場でも授業で高齢者や高齢化について学ぶ機会があったということが考えられる。結果として，それが子どもの造形作品に表れるようになったのではないだろうか。また，祖父母が描かれている場所が家庭の中ではなく，病院や医療福祉施設であったということにも注目したい。核家族化が進行し，祖父母と離れて住む家庭が増加し，介護も家庭内で行うのではなく，外部化されていったということが考えられる。しかし，地方の農村部では，まだ現役で働いている祖父母の様子が描かれていることから，地域格差もあると推察される。

家事労働の出現率の減少について，家事も外部化されてきた事や，経済的な背景から母親が働きに出る家庭が増加したことが要因として考えられる。

住居においては，これまでの，夫婦二人と子ども二人というような家族を想定した住戸だけでなく，単身者や高齢者，シングルマザーと多様な家族の形態を考慮した住宅が登場してきた。

「高度経済成長・住宅の大量供給時代」では，西山卯三の提案した，食寝分離がひとつの目標であったが，「経済の低迷期・需要の個別化時代」では，主

寝室と居間とを合わせてつかう単身者用のワンルーム型の住居や，住居に仕事のスペースが入ってくるＳＯＨＯのような，自宅で仕事をするような暮らし方が提案されるようになってきた。今後ますますこういう傾向が増え，仕事場だけでなく，託児所や保育所・デイルーム，集会所や共通の台所といった機能を含んだ住宅が設計されていくのではないかと考えられる。

地域との関係が希薄化してきたかについては，新たなコミュニティの場が同じ建物内につくられてきているという傾向があった。具体的には，コミュニケーションの場として，共用庭や託児所などの生活支援の場，共用の銭湯がつくられているケースがあった。

以上のことから，社会の様々な変化が，子どもの造形表現や住空間にも影響を与えているということがわかった。

調査した「経済の低迷期・需要の個別化時代」における分析・検討の結果をまとめると以下のようになる

- 子どもの描く造形表現においても，住空間に表れる家族像においても，高齢化がみられること。
- 第Ⅰ期から第Ⅲ期を通して，家事があまり描かれなくなったことは，家事が外部化されてきたことや，住空間においても住宅の産業化や台所がコンパクト化する傾向と合わせて考えることが出来ること。
- 女性の社会進出の影響により，家事・育児のあり方にも変化がみられたこと。
- 家族の形態が多様化してきて，空間もまた多様化してきたこと。

Ⅳ. 全体的考察

この章では，「高度経済成長・住宅の大量供給時代」・「経済の低迷期・需要の個別化時代」のそれぞれの時代区分における，図画工作教科書や美術教育雑誌・住空間にみられる家族像について，第Ⅲ章で導きだされた結果から，昭和35年から現代までの全体的な考察を行う。

1. 教科書・美術教育雑誌にみられる家族像

「高度経済成長・住宅の大量供給時代」においても，「経済の低迷期・需要の個別化時代」においても，家族の出現頻度は年を経るごとに減少している。コンクールの作品はさらに家族のでてくる割合が少ない。
この要因としては，核家族の影響で，大勢で食卓を囲んだりする機会が減ったことや夫婦共働きの家庭が増加したこと，また，受験競争が過熱化したため，小学校の頃から塾に通う子どもが増え，食事を外でとる機会が増えたことなどが考えられる。高度経済成長期頃から，よりよい進路のために学歴を身につけようとする風潮が広まり，大学受験戦争が活発になった。この風潮が現在もなお，つづいているといえる。他にも，ライフスタイルが変化し，子どもたちの興味・関心が時代と共に，多方面へと移り変わっていったことや，教育現場においての指導でも，扱う題材が絵画や彫刻，デザインの分野だけでなく造形遊びも扱うようになったことも，家族が描かれる頻度が減少した一つの要因であると思われる。

家族の生活空間の出現率については，住居・仕事場以外の公共空間が描かれる割合が，時代が進むにつれ増加している。「高度経済成長・住宅の大量供給時代」に，カー・カラーテレビ・クーラーが三種の神器となり，多くの情報の入手ができるようになり，移動手段も増えた。このことからレジャーに行く家族が増え，子どもの造形表現にもそれが表れている。「経済の低迷期・需要の個別化時代」においては，レジャー施設に加え，ショッピングセンターや飲食店の出現がみられた。これは，都市化の影響や食の外部化が進んだからであると考えられる。

祖父母の出現率については，「高度経済成長・住宅の大量供給時代」の第Ⅰ期と「経済の低迷期・需要の個別化時代」の第Ⅲ期にそれぞれみられるが，この二つの時代で描かれる祖父母の意味合いは違うと考えられる。「高度経済成長・住宅の大量供給時代」では家庭での様子が描かれていたが，「経済の低迷

期・需要の個別化時代」では家庭内以外の医療施設や老人福祉施設での出現がみられた。ここにも，やはり核家族の影響が表れており，核家族化が進むことにより単身で暮らす高齢者が増加し，家族の支援が得られにくくなったことが原因として考えられる。従来の老人ホームに加え，コレクティブハウジング[1]やグループリビング[2]等，家族以外の住まい方が多様化してきたことも原因の一つではないだろうか。

家事労働の出現率については，「高度経済成長・住宅の大量供給時代」の第Ⅲ期の教科書において，描かれている割合が増加しているが，これは母親がこの時期，専業主婦化することが多かったことが関係していると考えられる。「経済の低迷期・需要の個別化時代」では，家事労働が描かれること自体が少なくなっている。これは，家事自体あまり行われなくなったこと，母親も働きに出る家庭が増えたことが要因の一つではないかと思われる。

2．住空間の変容にみられる家族像

持ち家率（95 年調査）によると，一人世帯が 24%であるのに対して二人世帯は 62%と大幅に持ち家率が上がっている。この結果より，家族の存在が，住まいを手に入れようという強い動機になっていることがわかる。人々がマイホームを求めようとする理由として，戦後政府が持ち家政策をとってきたということ，そして企業もそれをバックアップしてきたということがある。当初は，住宅事情の悪化に起因して進められていた政策が，次第に質を重視するようになり，家族の幸福を実現する手段が住宅になっていったと考えられる。これは，ダイニング・キッチンやステンレス流し台の登場，そして 1950 年代に主流であった中廊下型から 1960 年代以降の家族全体が集まる室として，リビングを中心にするという，「居間中心型」へと志向が変化してきたことにも表れている。さらに，バブル期は，生活をファッションという尺度でみる傾向が強くなった。住宅に関しても「本来地域の独自性を表現していた住宅のデザインは影をひそめてファッションに変わり，新しい住宅地は万国旗をひろげたような百鬼昼行の景観に変わってきた。その混乱は「百花斉放」といえるかどうか。」[3]と西山卯三は述べている。他者との差や，ブランド感を持てることが住居を選ぶ際にも重要になってきた。

一方で，自分らしい暮らし方を求めて，コーポラティブ方式で家を建てる人や，フレキシビリティのある暮らし方を求める人，また住居を職場にする人も「経済の低迷期・需要の個別化時代」から表れるようになった。家族の構成に関しても，これまでの夫婦二人と子ども二人というような，標準的な家族のあり方だけではなく，高齢の単身者や子どもがいない夫婦だけというように，多

様である。こうして，多様な生活スタイルに対応した住居が登場してきた。ただ，多くのマンションや住宅ではｎＬＤＫという形式がまだ一般的である。

また，他の住民との関わり方については，「経済の低迷期・需要の個別化時代」では，共用で使用できるスペースを利用しながら互いに交流をはかっていこうという姿勢がみられた。これまでの地域社会との関わりとは違った形でのコミュニーケションの手段を，建築の中にも仕掛けていくことが，今後ますます増えていくのではないだろうか。

また，高齢化社会に伴い，単身の高齢者が孤立せずにサービスを受けられるような仕組みを今後ますます考えていく必要がある。集合住宅内に介護の為の施設を設けたり，病院と連携ができたり，近所の人々がみんなで見守れるように開放的なつくりにしたりと，様々な工夫がなされてきている。

３．子どもの造形表現と住空間との関わり

子どもの造形表現と住空間のどちらからも，その時代ごとの生活を通して表れてくる家族の姿を見出すことができた。

時代が進むにつれ，母親が働きに出かける家庭が増え，必然的に家事にかける時間は短縮されている。家事とは，炊事・洗濯・掃除はもちろん，家の中のあらゆる作業のことである。住宅の近代化の過程でもっとも変化の著しいところは，おそらく台所であると思われる。「高度経済成長・住宅の大量供給時代」に，団地を通して全国に広まったＤＫ平面では，作る場と食べる場の機能性を高めている。この頃から台所は主婦の場と位置付けられ，同時にすまいはより，家族のためのものとなった。一方で，食の外部化・簡便化もみられるようになる。子どもの造形表現においても食事に関連がある表現は「高度経済成長・住宅の大量供給時代」においては家庭の食卓や台所で，「経済の低迷期・需要の個別化時代」においては，食卓・台所と回転寿司屋などの外食の様子ともに描かれるようになっていた。食料消費支出に占める外部化比率の推移[4]をみても，「経済の低迷期・需要の個別化時代」は単独世帯の増加、女性雇用者の増加等社会情勢の変化の中で、調理や食事を家の外に依存する食の外部化が進展し、簡便化志向が高まっていることがわかる（**図75**）。

住居において，居間は家庭の中での団欒の場の象徴となったが，子どもの造形表現においての団欒の場は，家族の生活空間以外の公共空間である場合が多かった。子どもの造形表現では，家族が描かれる割合が減少する一方で，家族の描かれる場所は，家族の生活空間以外の公共空間が描かれる割合が増加している。この二つの関係はまさに裏腹の関係であるといえる。公共空間で描かれる家族は「高度経済成長・住宅の大量供給時代」においてはレジャー施設，「経

済の低迷期・需要の個別化時代」においてはレジャー施設に加えて，ショッピングセンターや飲食店であった。

高齢化の影響については，子どもが祖父母を家庭生活の中で描かなくなったという傾向と，実際に同じ住居で住む機会がなくなったことと関連づけて考えることが出来る。介護においても外部化がおこり，老人福祉施設や医療施設での様子が子どもの造形表現にみられた。住居においても，単身の高齢者がサービスを受けられるような仕組みやコレクティブハウジングやグループリビングといった試みがみられた。

以上の結果から，日常生活のあらゆる面での外部化が，子どもの造形表現にもあらわれているといえる。

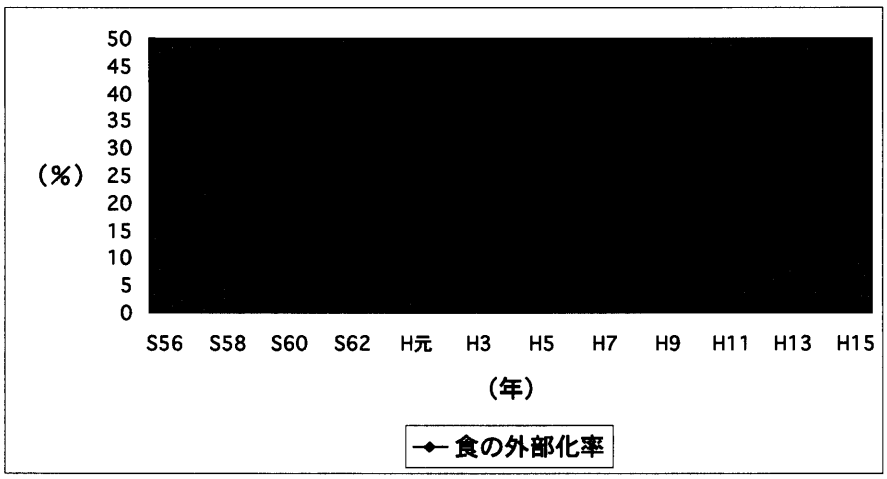


図 75　食料消費支出に占める外部化率の推移　※食育白書より作成

V. 結論

本研究により，社会の状況の変化が子どもの造形表現にそれなりの力学が働いて反映していることが見出すことができた。それぞれの時代ごとの家族の生活スタイルの変化が，子どもの造形表現や住空間にも表れていた。そして子どもの造形表現と住空間のそれぞれから見出せる「家族像」に高い率で重なりが見えた。本研究の目的は以下の①〜③であった。このそれぞれの結論について具体的に述べる。

① 家族や生活空間の変容が，子どもの造形表現にどのように表れるかを明らかにすること

② 住空間にみられる家族像の変容を把握すること

③ 上記①②から両者の家族像がどのように重なり合って表れるか，相互の関係を明らかにすること

まず，①について，小学校図画工作教科書（日本文教出版）と美術教育雑誌（教育美術）から導き出された結果についてまとめる（**表11**）。

表11 教科書・美術教育雑誌にみられる家族像

子どもの造形表現	家族や生活空間の変容
「高度経済成長・住宅の大量供給時代」においても，「経済の低迷期・需要の個別化時代」においても，家族の出現頻度は年を経るごとに減少	核家族の影響 夫婦共働きの家庭の増加
住居・仕事場以外の公共空間が描かれる割合が，時代が進むにつれ増加	レジャー施設の増加 都市化の影響
「経済の低迷期・需要の個別化時代」において祖父母の出現が，家庭内以外の医療施設や老人福祉施設でみられた	高齢化の影響
家事労働の出現率について，「高度経済成長・住宅の大量供給時代」の第Ⅲ期の教科書において，描かれている割合が増加	専業主婦化の影響
「経済の低迷期・需要の個別化時代」では，家事労働が描かれること自体が少なくなっている	夫婦共働きの影響

次に②について，住空間から導き出された結果をまとめると，以下のように

なる（表 12）。

表 12　住空間の変容から導き出された結果

住空間	結果
1950 年代に主流であった中廊下型から 1960 年代以降の家族全体が集まる室として，リビングを中心にするという，「居間中心型」へと志向が変化	家族の幸福を実現する手段が住宅になっていった
「高度経済成長・住宅の大量供給時代」にダイニング・キッチンやステンレス流し台の登場	台所が住居の中でも中心となる場所になった
「経済の低迷期・需要の個別化時代」にコーポラティブ方式や共用で使用できるスペースを利用しながら互いに交流をはかっていこうという姿勢，介護の為の施設がみられた	建築の中にも人と人との繋がりを生み出す仕掛けが取り入れられるようになった

これらのことから，家族にとって住居の価値が高まったことがわかり，住居平面をみることで，家族がどういった生活を理想としていたのか，どういった家族でありたかったのかを読みとることが出来た。

最後に③の子どもの造形表現と住空間の関わりについてまとめると，一つめとして，母親の家庭内での役割の変化や高齢化の影響，団欒の場の変化が子どもの造形表現と住空間のどちらともに影響を与え，時代ごとに家族像を見出すことが出来たということ。二つめとしてとして，日常生活でのあらゆる面での外部化の影響（育児の外部化・食の外部化・介護の外部化など）が，子どもの造形表現と住宅平面に表れていたということである。

具体的に例を挙げると，子どもの造形表現において，家族の生活空間以外の公共空間が描かれる割合が増加したことは，団欒の場が家庭内ではなく，レジャー施設やショッピングセンター・飲食店に取って代わったことを意味する。また，食の外部化により，子どもの造形表現に家事が描かれる割合が減り，住居平面においても台所がコンパクト化しているという現象がみられた。

子どもの造形表現に，家族内での役割の変化や人間関係の変化が表出しているということは，子どもの造形表現における発想の源が，家庭生活からの影響を多分に受けているということだろう。また，万博の様子やショッピングセンターを描いたものなど，直接家族が描かれていない子どもの造形作品からも，それが描かれている背景からは，家族の存在を垣間見ることが出来る。日常生活での家族との関わりが子どもの心象風景となって，造形表現に表れたのではないだろうか。そして，その日常に大きく関わりがあるのが住居である。

また，今回の調査により，予想以上に子どもの表現の中に家族が描かれているものが少なかったこともわかった。家族との関係は極めて日常的なものなので，子どもの日々の日記などが入手出来たなら，また結果が違うものになっていたのかもしれない。しかし，今回の調査である一定の傾向を見出せたという点では成果が出せたのではないかと考えている。そして，本研究を通して，子どもの表現を生む背景となるものは様々な「体験」であり，そこから表現が生まれてくるということもわかった。その体験を通して養われる「豊かな心」が子どもたちの成長とって大切なものである。

また，近年家族が多様になり，ライフスタイルも一つの形式に縛られなくなってきたが，そんな時代であるからこそ「学校」が地域の中で中心となって，暮らしの支援や子育ての相談の場として機能していくことが必要である。新たなコミュニティの場として，学校が地域に参画していく場面が，今後ますます増えていくだろう。

本研究の今後の課題を述べると，今回の調査・分析結果は調査対象の標本数が少数な為，今後，より多角的な調査が必要であると言える。また，農村部と都市部では，経済・産業の状況に相違があるので一概に全ての地域で今回のような結論が出せるとは言えないが，ただ，教科書は全国的に指標となる作品が掲載されているといえるので，ある一定の傾向を見出すことが出来ると考えている。そして，今回，調査対象として絵画作品が主であったのは，家族や生活の様子がより明確に分析できるという理由であった。今後は，他の形態での作品も調査の対象にしていきたい。さらに，『教育美術』だけでなく，児童作品を掲載している他の美術教育雑誌などの資料も調査対象としていきたいと考えている。

付記

まず始めに，石川先生にお礼を申し上げたいと思います。多くの助言をして頂いたことで，ここまで仕上げることが出来ました。何度もあきらめそうになった私を最後まで見放さずにいて下さった石川誠先生に感謝の意を表したいと思います。本当にお世話になりました。

それから、お忙しい中にも関わらず助言をくださった，安江先生にも感謝の意を表したいと思います。本当にありがとうございました。

また，本研究を進めるにあたり，所蔵資料の閲覧を許可して下さった，京都工芸繊維大学図書館，大阪教育大学図書館，日本文教出版の関係者各位に感謝申し上げます。

最後に，様々な場面で私を支えてくれた家族，研究室のみんな，友人にもお礼を言いたいと思います。

みなさま本当にありがとうございました。

■ 註

第Ⅰ章

1) 藤田英典「教育政策と家族（Ⅰ）近代家族の展開と教育－戦後マイホーム主義を中心として－」『わが国の家族と制度・政策に関する研究』総合開発研究機構，1988，p.18 および p.21
2) 宮武辰夫『幼児の絵は生活している』（改訂新版），文化書房博文社，2000，p.37

第Ⅱ章

1) 岡清美「家族をどうとらえるか」森岡清美・望月嵩編『新しい家族社会学』培風館，p.4
2) 香山壽夫「建築意匠講義」東京大学出版会，1996，p.9
3) 香山壽夫「都市計画論　－私達の都市をいかにデザインするか－」放送大学教育振興会，2002，p.144
4) 荻原元昭「幼児教育の社会学」放送大学教育振興会，1988，p.17
5) 河井隼雄「子どもと生きる」創元社，1985，p.226
6) 矢田貞行「高度成長」山崎英則・片上宗二編『教育用語辞典』ミネルヴァ書房，2003，p.179
7) 新村出「広辞苑」岩波書店，1991，p.2095
8) 三根和浪「戦後教育改革の時代」若元澄男編『図画工作・美術科重要用語 300 の基礎知識』明治図書出版，2000，p.225
9) 金子一夫『美術科教育の方法論と歴史』中央公論美術出版，2003，p.204
10) 金子一夫，前掲書，p.210
11) 金子一夫，前掲書，p.210
12) 金子一夫，前掲書，p.225
13) 金子一夫，前掲書，p.230
14) 金子一夫，前掲書，p.236
15) 金子一夫，前掲書，p.237

第Ⅲ章

1) 『教育美術』（教育美術振興会）で，昭和 35（1960）年から昭和 37（1962）年と昭和 39（1959）年の号については入手が難しく，今回は調査出来なかった
2) 経済企画庁『昭和 45 年版国民生活白書　豊かな人間環境の創造』，1970，p.58
3) 経済企画庁，前掲書，pp.66-67
4) 経済企画庁，前掲書，p.12
5) 国土交通省白書等データーシステム『家族類型別一般世帯数及び単独世帯割合の推移』http://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/h14/H14/html/E1022101.html
6) 国民生活センター「世帯人員にみた世帯数と平均世帯人員の推移」『国民生活統計年報』，志誠堂
7) 「公私室型」平面とはリビングを中心とし，その他の室として個室がつく平面である。
8) 経済企画庁，『平成 6 年版国民生活白書　実りある長寿社会に向けて』，1994，p.365
9) 住民基本台帳人口閲覧，国土地理教会，2004，p.27
10) 国土交通省白書等データーシステム『多様化する高齢者の住まい一自宅志向が低下する老後の住まい方』http://www5.cao.go.jp/j-j/wp-pl/wp-pl01/html/13103b00.html
11) 経済企画庁，『平成４年版国民生活白書　少子社会の到来，その影響と対応』，1992，p.429
12) 定行まり子「日本における集合住宅計画の変遷」高田三雄編，放送大学教育振興会，1988，p.118
13) あらかじめ協議された設計上の共通仕様のこと
14) 離れの間のこと

第Ⅳ章

1) 個人の住宅部分とは別に，ダイニングキッチン・リビング等居住者同士が交流し，支えあう共同の空間を兼ね備えた集合住宅のこと。
2) 高齢者の身体機能の低下を補うため，5～9 人の居住者がお互いの生活を共同化・合理化して共同で住まう一定の居住形式のこと。
3) 西山卯三「すまい考今学―現代日本住宅史」彰国社，1989，p.379
4) 平成 18 年版食育白書『食育推進にいたる背景と取組の本格化　―年次報告書の第 1 回作成に当たって』http://www8.cao.go.jp/syokuiku/whitepaper/2006/book/html/06sh0101011.html

■ 図版出典

図 5　日本児童美術研究会『図画工作 1』日本文教出版，昭和 35 年 5 月
図 6　日本児童美術研究会『図画工作 1』日本文教出版，昭和 35 年 5 月
図 7　日本児童美術研究会『図画工作 1』日本文教出版，昭和 35 年 5 月
図 8　日本児童美術研究会『図画工作 3』日本文教出版，昭和 41 年 1 月
図 9　日本児童美術研究会『図画工作 2』日本文教出版，昭和 41 年 1 月
図 10　日本児童美術研究会『図画工作 4』日本文教出版，昭和 48 年 3 月
図 11　日本児童美術研究会『図画工作 4』日本文教出版，昭和 42 年 4 月
図 12　日本児童美術研究会『図画工作 3』日本文教出版，昭和 42 年 4 月
図 13　教育美術振興会『教育美術　2 月号』，昭和 43 年 2 月
図 14　教育美術振興会『教育美術　2 月号』，昭和 46 年 2 月
図 18　教育美術振興会『教育美術　2 月号』，昭和 45 年 2 月
図 22　日本児童美術研究会『図画工作 1』日本文教出版，昭和 35 年 5 月
図 23　日本児童美術研究会『図画工作 1』日本文教出版，昭和 35 年 5 月
図 24　日本児童美術研究会『図画工作 3』日本文教出版，昭和 41 年 1 月
図 25　日本児童美術研究会『図画工作 1』日本文教出版，昭和 48 年 3 月
図 26　日本児童美術研究会『図画工作 2』日本文教出版，昭和 45 年 3 月
図 27　日本児童美術研究会『図画工作 4』日本文教出版，昭和 48 年 3 月
図 28　日本児童美術研究会『図画工作 4』日本文教出版，昭和 48 年 3 月
図 29　日本児童美術研究会『図画工作 1』日本文教出版，昭和 42 年 4 月
図 29　日本児童美術研究会『図画工作 4』日本文教出版，昭和 42 年 4 月
図 31　日本建築学会『設計資料集成』丸善，2000 年 2 月
図 32　日本建築学会『設計資料集成』丸善，2000 年 2 月
図 33　教育美術振興会『教育美術　5 月号』，昭和 40 年 5 月
図 34　教育美術振興会『教育美術　2 月号』，昭和 38 年 2 月
図 35　教育美術振興会『教育美術　2 月号』，昭和 42 年 2 月
図 36　新建築社『新建築』2001 年 3 月
図 37　建築資料研究社『図説　日本の間取り』2001 年 5 月
図 38　日本建築学会『設計資料集成』丸善，2000 年 2 月
図 41　日本児童美術研究会『図画工作 3』日本文教出版，昭和 51 年 3 月
図 42　日本児童美術研究会『図画工作 4』日本文教出版，昭和 51 年 3 月
図 43　日本児童美術研究会『図画工作 2』日本文教出版，昭和 51 年 3 月
図 44　日本児童美術研究会『図画工作 2』日本文教出版，昭和 61 年 1 月
図 45　日本児童美術研究会『図画工作 2』日本文教出版，平成 3 年 4 月
図 46　教育美術振興会『教育美術　2 月号』，平成 11 年 2 月
図 47　教育美術振興会『教育美術　2 月号』，平成 11 年 2 月
図 48　教育美術振興会『教育美術　2 月号』，平成 6 年 2 月
図 52　日本児童美術研究会『図画工作 5・6 上』日本文教出版，平成 13 年 3 月
図 53　日本児童美術研究会『図画工作 3・4 上』日本文教出版，平成 16 年 2 月
図 54　教育美術振興会『教育美術　2 月号』，平成 11 年 2 月
図 57　日本児童美術研究会『図画工作 6』日本文教出版，昭和 61 年 1 月
図 58　日本児童美術研究会『図画工作 1』日本文教出版，平成 3 年 4 月
図 59　教育美術振興会『教育美術　2 月号』，昭和 52 年 2 月
図 60　教育美術振興会『教育美術　2 月号』，昭和 55 年 2 月
図 61　教育美術振興会『教育美術　2 月号』，昭和 60 年 2 月
図 63　日本建築学会『設計資料集成』丸善，2000 年 2 月
図 64　日本建築学会『設計資料集成』丸善，2000 年 2 月
図 65　日本建築学会『設計資料集成』丸善，2000 年 2 月
図 66　日本建築学会『設計資料集成』丸善，2000 年 2 月
図 67　建築資料研究社『建築設計資料　ＳＩ住宅――集合住宅のスケルトン・インフィル』2005 年 6 月
図 68　新建築社『新建築』2002 年 4 月

図 69　新建築社『新建築』2002 年 4 月
図 70　新建築社『新建築』2001 年 3 月
図 71　教育美術振興会『教育美術　2 月号』，平成元年 2 月
図 72　教育美術振興会『教育美術　2 月号』，平成 6 年 2 月
図 73　教育美術振興会『教育美術　2 月号』，平成 6 年 2 月
図 74　教育美術振興会『教育美術　2 月号』，平成 17 年 2 月